抵抗

創刊号

抵抗同人會

抵抗

創刊号

何処に……椎貝文雄　一
初恋……塚原正夫　一四
風景……南雲勝彦　二八
朝霧……石動利治郎　三六
遠い太鼓……立花恵子　四七
マント……椎貝繁夫　五七
編集後記……　七一

抵抗

創刊号

抵抗

創刊号

何処に……椎貝文雄　一
初恋……塚原正夫　一四
風景……南雲勝彦　二八
朝霧……石動利治郎　三六
遠い太鼓……立花恵子　四七
マント……椎貝繁夫　五七
編集後記……七一

抵抗

創刊号

雑木林

編集部
三三部

何處に

椎貝文夫

石段に積つた、落葉もふみながら海鹿寺に続く雑木林の中を孝次は歩いて居た。

ずつかり葉を落した雑木林は明るく清潔な分囲気を漂よわせて居た。それでいて何か孤独なものを感じさせる。石段を昇りきるとすぐ目の前に海鹿寺の山門が見えた。所々に剥ちた、朱塗の柱、そうのようで敢かい動物か白い鳩のくそをかぶつて柱の四隅におとなしく眠つて居た。その下にもやはり同じく、筋肉のもりあがつて裂の様な顔をした大男がカッと目を開け、全身に鳩のくそをかぶつて突立つて居る。

それをくぐりぬけると、本堂が目たりの雑木林を威圧するようにそびえて居る。庭にはいちようの葉が、足をふみ入れる場所が無い　ちかつて居た。

それを二、三人の小坊主が、高箒で、山の様に積み上げ、銀杏の老木の下で燃やして居た。孝次は、小坊主達に近つき

「秋村さん、知らない？」

小坊主達は、分別臭そうに互いに顔と顔を見合はせて、黙つて居たが

その中で一番皆のひくい坊主が、高箒のえでたき火の山をつつきながら

「本堂の裏に居るよ」　妙に会決に答えたきりでしやがみ込んでしまつた。

孝次は、その小坊主の態度に、腹立しさを感じて、

「フーン」と人を小馬鹿にした、態度で返事をして見せ、張り石を、つたわって本堂の裏にまわった。本堂から少しはなれて、急傾斜な山に、老杉が幾十本と重なり合って居て、日中でも陰気臭かった。その中頃に一本の松の木が赤いみきをくねらして、しなやかな枝をのばして居た。昔此の寺に修業に来た、小坊主達は一人前になるまで、つとまらず、家に逃げ帰るか此の松の木で首をつるかと迷い、首をつる者が多かった事を死んだ祖父から聞いて居たので、孝次は気味が悪くて、余り本堂の裏には、よりつかなかった。

彼は梢先からもれて来る、陽を斜めに肩に受け、薪を割って居た。孝次は彼の姿を見つけ、ほっとした気持になり、

「鉄知――さん」大きい声で呼んだ。

彼は彼をふりかえり微笑しながら

「やーあゝ今日、あたり来るかと思って居たよ」

孝次は彼の前に走り寄り、

「寒いませんか」

「もう完りだから良いよ」

「そうですか」云いながら孝次は彼の割った薪の上に腰かけた。それで小坊達が物に冷淡だった事を話した。

「今日、お寺で何かあったの？」

彼は薪割を下に置き、孝次の横に腰かけながら、不審そうな顔で。

「否、別に……どうして？」

孝次は彼の言葉に何か欺瞞を感じたか、別に詮索もせず雑談を書き上げた。小説を見せた。

「これ持って来たんですけれど」批評を予想しながら帰る〳〵手渡した。

「ほう――中々熱心だね」と受取りていねいに読み始めた。

孝次はその間や、横顔をながめ、本堂の屋根裏にそしてランプの彫刻にやたりして居た。

心の中では小説と何んの関係も無い事を考えて居た。鉄知の事を考えて居たのだ。

彼がお寺に来た時（孝次が中学二年の時で十四才の頃）の姿が妙に脳裡の中から消え去らなかった。頭の毛を四方八方に延びるにまかせ、

空虚な目で本堂の前で突立ち、阿弥陀座像を眺入るように眺めて居た。そして「人間は死ぬは必らず、極楽か地獄に行く、極楽に行きた者は阿弥陀様の念仏を唱えるが良い」とつぶやいて居た。その横に伯父から、鉄知と云う名を貰って、お寺に弟子入りしたのだった。それから五六日たって父が母に何かって彼の事を話して居るのを、孝次は隣室で聞なかりきいたのである。

都会でも豪商の息子である事、大学に行って居た事、その内、女と交合うようになった事、お金を持ちだし一ヶ月も家に帰らなかった事、そして金に困り出し二人で自殺をして彼が生き残った事、家に帰えれずに下村に死場を探しに来た事を第一番に思い出すが今の鉄知の姿はどこにも見られなかった。

彼は一応通り読み終ると、陰鬱な顔をして、

「表現法が美事だね、しかし重みが無い作品だ」と云ったきり、いつもの通り細くは詳してはくれなかった。

それが孝次には不満に思い、

「孝次はどうですか？」と聞いた。

すると彼は非難する目つきで

「仏教の世界は、そんなせい者えじゃない」と云いながら、彼は立ち上がり薪割を始めた。その態度が余りに冷淡なので、孝次は悲しのきつかけを失い反論したい気持をおさえて

「ぢゃ、もう一度、書き直して来ます」と云って薪の　飛び下り元の来た道を引返えした。

本堂の前まで来ると、伯父と行き合った。伯父は高い廊下の上から声をかけた。白い眉毛、白いあごひも、剃の深い頬に落ちくぼんだ目がするどく孝次の視線をとらえた。

「あかりなさえ」孝次は伯父から命令的かや敬くても、云はれゝばいつもしたがわなくてはならない義務を感じるのであった（孝次はいたずらな空想で仏教を怖ろしがって居たので幼少の頃から伯父が怖りのかった）

伯父の後について行くと　の中に通された。

そして伯父は、鉄知の美点を自慢して云った。

「仏につかえる者は、鉄知のような人間らしい態度、鉄のように固くて重い信念、彼たら、仏の

道を前屈する事等を、はそりはそり語った。孝次は一寸意味のわかりかねる所を聞いて見た。

「俺の道っては一体どこにあるんですか？」

伯父は、ワッハハと豪快な笑い声で

「精神が統一した時に開けるのだ」

そう云われても孝次には理解が出来なかった。孝次は訳もすじもいにする事が、いつも不快に元因になるので追求するつかりで、しつこ聞いて見た。

「かやー俗数とは何んですか？」

その言葉を聞くと伯父は笑いをくずし、眉毛をひり〳〵ふるわせ、姿勢を正して、八十九とも思えぬ大声で、「居座者!!」と怒鳴った。

孝次は義上からんばかりに驚く　から本堂にとびだしてしまった。孝次は、下駄を履きながら怒鳴られても訳らぬ所は微度的に輪し合うべきだとか、鉄翔の態度が冷淡だった為か腹立しさ感じれた。表石の上を歩きながら帰りの腹立しさに「莫坊主」と心の中で怒鳴って見た。山門の踊の雄英堂の所まで来ると鉄知が夕方の鐘を撞く為に、鐘の下に微何さになり両手を胸の上に組んで立って居た。夕暗の中にはっきりと一線を引いたように海の波打ぎはが黒い防風林の間から眺められる、そこら辺に点在する漁夫さの屋根から、うすく脱煙が立ち昇って居た。晩秋の冷たい風が雑木林をざわめかせ、鉄知の衣をひるがえして通り過ぎて行った。孝次は暫か立って居たので知らぬ顔をして通り過ぎてしまった。孝次は家に帰えって炬燵の中で鉄知の事を考えて居た。自分が考いた小説の中に何か故の点にさわった所があったのかも知れない。愛敬、雄英堂での、あの孤独な姿、仏教に対して熱心な信者である事が思い出された。伯父が彼にお寺の後継にする考えで居る事、お人達が彼に尊敬して居た。英麟板の仏教に対する熱心な態度には尊敬せざる迄なかった。間のある時は哲学書を読み、それでなかったら村に来て一町、一町の町下に立ち巡礼をして歩いていた。それ程、彼は熱心と熱心な姿に村人達は心を打れて居た。

孝次は自家で聞って居た。場が逃げて、お寺

山門に居る事知って、夜迄まえに行った　大抵かゴウゴウと雑木林を鳴して居た。風はもう冬の風である。孝次は山門の柱によじ昇り象の頭の彫物の頭に手をかけなんなく裏板の上にあがった。山門の裏板はかすちからさしこむ月光でほのかに明るかった。場は気験を感じゴロゴロポゴロゴロポとのどを鳴し、横柱にかたまってひしめき合って居た。裏板は場の奥でこちらに固まって居た。孝次は自分の場を囲えて下におりようと思った時、下で若い男女がもつれるようにして話をして居た。孝次はきょうみを引れ、裏板に腹ばいになって下をのぞいて見た。

「今までの事は忘れて私と帰えってちようだい」

女の声は泣き声でふるえて居た。

「俺は、あの女と心中した事を知って居るだろう、帰えって行いけば世の中の人間は放蕩息子が帰って来たと云う。両親はかたみかせまい思いをするだろう、否、そればかりではない社会俺は世の中の人間には愛して貰らいないなって居るんだ」　冷全として夜空の空間を眺めて云った。

女は男にすがりつきたい程の声で

「あの女の人は悪い人だったのよ、それにも死んでしまったんですもの」　と云った。

「死んでなんか居るものか！　俺の心のどこかで怨をして居るんだ。死んで居るならこんなに罪を感じないだろう」　駆全として云った。

孝次は裏板の場の奥に尊の頭をすりつかる程、涙中で下をのぞいて居た。男は話の具合で鉄翔である事を知った。そして鉄知が俗に対して熱心さが狂る様な気がした。今までの罪を克服しようとして俗にすがりつく、これが本当の鉄知の姿だと思った。

「人間の愛なんて信じられぬ」ぽつんと鉄知は云った。女はその言葉を聞くとバネ人形のようにびくっとした。

「私は貴男が……どうなろうとも愛して居ます」

「世の中は訳らぬ故に信じられないのだ。あの女だって永遠に愛すると云って居たそれが金のきれ目が縁のきれ目だと云った。その矛盾に俺は絶望をした。やけで熱引に死の道づれにした。それが俗だけが生き残って云った。

居るんだ、なんと云う予盾、愛する……信じられない」 絶叫にも似た声だった。女は声を出して泣いた。

「私も……私を信じて讃らめないの……私はあの女の人の様に上手には愛の表現は出来ないわ……しかし愛して居る事は信じて下さい」 かたをふるわし、両手で顔をおさえときれ〳〵に云った。

「……」 鉄知は柱の前に両手を組み黙って居た。

「婚約を解消するの、貴男の両親はこれが最後の期待なのよ!! 私が嫌いならそれでも良いわ、いつわりの結婚でもいいわ、親に対して許される最後の望みなのよ、そして痛めつけられた心のきづなをさずのさ」

「男は……どうするんだ」 鉄知は一寸驚きの表情で聞いた。

「私、私はどうなったってかまわないわ、貴男が幸福ならそれでいいの、私に心配しないで帰えって、お願い」

木枯が彼等を遠慮なく叩きつけ、その夢で無水

然の中へとび込んで行った、青白い月光が二人の足元を照して居た。

「俺は帰りたくない、此の寺でサトリを開くのだ」

彦次は人間の力ではどうでい仏教から鉄知の精神を引き放せぬ事を感じた。

「そしてそれで貴男が幸福なら、もう何にも云わないわ」 といい女は放心したように首をたれ、おぼつかない足取りで石段の下に消えて行った。

鉄知は女の消えて行った方を凝全として眺めて居たが、

「愛して居るんだ」 と叫び山門の柱にすがりつくような格子ではめんして居た、そして又、女の消えて行った石段に両手を合せ

南無東方善徳仏三世の諸仏の守護 マウ所ナリ衆苦群迫悉入スルコト有ルコト無三一切の邪見生死之爆敗セ所急不

南無阿弥陀仏 ——南無久遠実成六思教主釈迦牟尼世尊、南無阿弥陀仏

お経を唱えて居た、木枯が衣を千切るばかりに

たたきつけて居た、月光が彼の上半身を照らし、その姿はなんとも云えぬ孤独に苦悩して居る人間に見え、彦次は彼の「生きる」「生」と云う精神の重量に圧迫されそうな神々しさを感じ、知ず知ずに感動されて居た、仏教用語と云う意味が始めて訳かって行きそうな感覚を感じた。

彼ならサトルと思った。

明日から彦次は毎日の様に彼の所へ遊びに行った、そして毎日、同じ言葉を聞いて来た。

「仏の中には美しい真実がかくされて居る、私はそれを掴み取り自分の物にするのだ」

彼はいつもほこりと信頼を持って良く云って聞かせた。

それからしばらく立った、或る日、彦次は遊びに行った、鉄知は本堂の廊下の石段で雑誌を読んで居た、そばに行き彦次は彼を「仏様」と呼んだ、彼は憂鬱な顔をして居た、チラッと見て又雑誌を読んで居た。彦次は下から

「大なる仏よ己れに力をかしたまえ」 と大きな声で云って見た、すると彼は雑誌から視線を放し彦次の方を見なから

「仏けには力も能力もない」 とものすごい冷淡な顔をして云った、余りの冷淡さに彦次は感立しさを覚いて反抗した。

「おや何故鉄知さんは仏の信者なのですか」

鉄知は雑誌を下に置き

「仏よ仏そして仏 これで三度呼んだ事になる、何かの役に立つなら何度呼んでもそんはないだろう」

と云った彼の顔にはいつもの信頼もほこりも見られなかった。彦次は彼の表情を見て、そうはいいしながら彼の言葉を引用した。

「仏には真実があるんでしょ」

すると彼は眉毛を吊り上げ怖しい程のきよ相をして、「無」と答えた。彦次はその言葉を聞くと悪気がする程、怖しかった。あれ程熱心だった彼が、「仏を否定する」とは意外だったから……彦次はあてこすりに云って見た。

「精神の教養がたりないじゃないかな」 彼はその言葉を聞くと怖しいきよ相が消え、深く憂愁

しに顔になつてうつむそうらしいと云つてうなだれてしまつた。

それから孝次は四、五日、学期末の試験かいそがしくて、お寺には遊びに行かなかつた。

幾何をやつても英語をやつても、鉄知のあの怖しい顔が頭脳の中にこびりついて思うように行かなかつた。殊に試験が一週間も続き発表されるのが怖しい答案を書いて居た。最後の試験も終つた一日、孝次は学校から帰えるといそいそとお寺に行つた。お寺には人のけはいがなくひつそりして、森にからんとして居た。孝次は不安な気持で、寺男の所へ行つて見た。寺男は釜に湯をして居た。孝次は入口の所で問えて見た。

「お寺には誰も居ないの？」

寺男は真黒い顔をあげて、黄色い歯をむき出し

「本堂の中で座禅をしてるいやと云つて本堂を指して云つた。孝次は不安から解放された気持になつて、急がるく階段を昇り、中をのぞいた。弟子達はきようきよく、あぐらを組んで阿弥陀像の前に並んで居た。美しい顔をもつた阿弥陀座像は鎌倉時代の作だと伯父は自慢して云つて居た。その阿弥陀様を見て居る内に孝次は中学三年で教めつた歴史を思い出した。平安末期から鎌倉時代にかけて、あめたかしい世の動きは、人々の心に不安と動揺をあたえ、人の世の、はかなさを感じさせ、阿弥陀様のような仏像を作り、極楽に行ける様に祈つた。或いは又死についての心構えを必要として居た。阿弥陀像はそれらの歴史につつまれ神秘的に、小坊主達と威圧するように蓮の花の上に座つて居た。孝次はしばらくのぞいて居たが座禅を始めると何日も会えぬ事を知つて居たのでそのまま帰えつてしまつた。

学校で試験の結果は予期して居たように怖しく悪るかつた。それから孝次は学校から帰えつてまるとしばらく炬燵の中で勉強に熱中した。

それから十日目の日曜日の午後から座禅も終つたろうと思い、孝次は遊びに行つた。二日前雨が降つたので石段に積つた落葉がぐしゃぐしゃして歩く下駄の間にはさまつて気持が悪かつた。

山門の所まで来ると小物主達は、日向たばつことして雑談して居た。孝次は通りすがりに鉄知の事を聞いて見た。

「鉄知さんは？」

彼等は口をつぐんでしまつた。それで孝次は自分と彼等の間に、なにか悪感なるものを感じた。しばらく立つて居ると二人が一ぺんに「本堂の中だよ」つづけざまに答えた。孝次は、「あーそう」と答え本堂に足を運んだ。後で彼等は又、話し出した。それも孝次にはっきりと聞える。あてこすりを云つた。

「鉄知の奴、おしようさんに良く思われたくて整理してやって居るんだ」

「ふん、奴は馬鹿なんだ!!」

「座禅を人一倍したって仏の道なんか訳るものか」めいめい勝手な悪口、馬とうして居た。

孝次はその言葉が耳に入るなり、彼等の所にかけ戻り、「貴様等のような義坊主には鉄知さんの心の中が訳るか」腹立しまぎれに、大声で怒鳴つた。小坊主のその中で一番弟子かぶる〳〵ふるえながら「義坊主とは何事だ」こぶしを固めてなぐりかかつて来た。孝次も敢けずに挑戦した。しばらくなぐり合をして居る内に体力の差が出て来て、孝次は、けが味だつた。それに七つも年かちかつて居た。孝次は早く逃れが伯父を呼んでくれれば良いと思つた。結局最後に孝次は、のばされてしまつた。孝次は痛む体を起し、彼に敗北の復讐を受けて、本堂の中をのぞいた。げどりとやせ目だけを光らせて、彼は阿弥陀様と接触するようにまだ座禅を組んで居た。孝次は得体の知れない強い新鮮になり、もう二度とお寺に来ない決心をして帰宅した。

それから五日もすると、やはり、寂しくなつて鉄知の神力遊びに行つた。本堂の中を見て驚いた。彼はまだダルマのように微全として、阿弥陀様をにらめつけて居た。孝次は黙んでしまんではないかと云う不安におそわれて伯父の部屋に行つた。伯父は座の中でお茶を呑んで居た。孝次は入るなり

「伯父さん、鉄知さんは大丈夫ですか？」

伯父はめずらしく上気嫌で

「大丈夫――あの熱意が仏の姿だ。奴は仏道を聞く。法然の様な人間になる。俺の目は間違ない」

ひじかけいすに乗りかかるようにして云つた。
お経を子守唄の様に聞いて育つた孝次には仏教と云うものが成長して行くようにしたかつて、猶為小説のようにふくざつで、ややこしいものに思えた。第一、精神統一と云う言葉の意味が訳らなかつた。但父の部屋から出て本堂の廊下に坐ると小坊主達と行き合つた。小坊主達は障子に指で穴をあけ本堂の中をのぞいて線香の知れない煙を立てて居た。小声で小坊主達は話し合つて居た。「良く思われたくてやつてるんじゃないよ、本物だよあれはたゞ事で出来ないものな」小坊主達は孝次が来た事に気がついてこそこそ隠突堂の方に行つてしまつた。孝次は彼等が残して行つた、穴からのぞいて見た。彼方に思える程、やせて顔が蒼白であつた。心中した女に、それから親にかんどうされた事にそれ程の罪を感じて居るのか、又、現実を求めるにはこれ程の苦痛をたえて行かねばならないのか。但父は鉄知のような在家が本当の仏の姿だと云つて居た。孝次は彼を眺めて居る内に人間の悲哀を強く感じ、「鉄知さん」と小さな声で呼んで見た。

彼は何んの動揺もしなかつた。今度は少し大きい声で呼んで見た。が、前と同じく何んの動揺もしなかつた。孝次は忍耐力気短で遂に帰って行つた。

村は正月の気分を漂わせ、妙に村人達を落ちつかせなかつた。門松を立て新年からモチを突く音が何にか楽しげだつた。孝次は二日ぶりで長の中に彼の事を考えるとじいとして居られずお寺に行つた。雑木林の石段の途中まで来ると上から和服を着た上品な女の人が下りて来た女の人の顔は、村では中々見られない程、あかぬけして居た。すれちがいにある石段の二三段の所で女の人は立止り

「お寺に行くのですか？」と聞いた。

孝次はときまぎして

「そうです」と答えた。すると女の人は話問するような顔で。

「鉄知さんとこう、お坊さん知つて居る、すき通るアクセントで聞いた。孝次は半ばそちらかう彼と親友である事を説明した。すると女の人は雪子と云う名である事を教え鉄知を呼んで貰い

たいと孝次にたのんだ。孝次は女の人に山門の所で待つように云い、本堂にかけ上つた。そして中をのぞいた。孝次は大地かくずれる様の恐怖をおしつけられた。もう庫裏も終ったらうと思つて居たのに鉄知はうつ伏せになって、かにの足のように腰に足を立てて口から卵の白味のようなのろを出して動かなかつた。何那花嫁は美しい顔で冷淡に。そんな彼を見つめて居た。大変だ〈〈と孝次は叫びながら長い本堂の廊下を に向つて。はしって行つた。 の前まで来ると、但父は部屋の外に出て居て蒼白な顔で走つてまる孝次を怒鳴りけ。

「ろうせきする女！」孝次はそんな但父を今日は恐しいとも感じなかつた。但父の前まで来ると「鉄知さんが死んで居ると云つた。但父は一寸驚いた顔。とうりくしに、複雑な表情をした。が、すぐ死ぬ者はないと断言した。そこへ小坊主達も心配顔で集って来た。そして皆で本堂に走けつけた但父は米の袋をひるがえして本堂の中に入ると鉄知を抱き起した。鉄知はかすかに息をして居た。座の中にかつぎ込み鉄知の胸に顔をあてて居た但父は地元にしがみ鉄知の胸に顔をあてて居た

が十日ぶりの鉄知は蒼白と云って外に出て行った。小坊主達も安心して但父のあとについて行ってしまつた。孝次は何なか出て行った後で雪子の事を思い出し、「鉄知さん、雪子さんが来ましたよ」耳元にはをあてて大声で云って見た。彼はかすかに首を横に二三度動かしただけだつた。孝次はしかたなく、雪子の待って居る山門に一つのうそを作りながら戻って行つた。雪子はお寺での事件を知らず、待ちくたびれた様子で目下に眺められる風景を見て居た。が孝次の姿って来たのを見つけると。

「鉄知さん、居なかつたの？」孝次は作り上げたうそを改るだけ良心的に話し始めた。

「鉄知さんはね、京都に勉強に行って来年にはいらなければ帰いって来ないんだ」孝次は話して居る内に何故か淋しくなって涙が出そうになった。

「京都？すい分遠い所に行ったのね。

雪子は一人言のように云って

「此のお寺ってすい分廣いのね一緒に歩いて見ない？」雪子は興けんに孝次をさそった。

孝次は雪子の心の奥の奥の底に孤独なものを想

く頷いた。孝次は自然に同情的になりお寺の中を案内してやるつもりで歩き始めた。鐘突堂を眺め、その脇の道を通つて、梅林に行つた。梅林に行く路は雪かとけて歩くのに雪がおれた。梅林の中は静寂生に囲つて居て足の汚れる心配はない。孝次は歩きながら、何んて話かけたら良からうと考えて居た。姉さんでは不良臭くていやだし、雪子さんでは変だし、小高い丘の上に来ると雪子は

「こゝにすわらない？」云いながらハンドバックからナイロンの風呂敷を出して孝次に座らせ自分もすわつた。そこからは村全体が眺められた。青々としに麦畑が続き、その中に点在するわらぶきの家々。村長さんの新築のそろつた家々。線の防風林の間から白い波頭が美しく眺められる。沖には二艘の帆船がゆつくりと南下して居た。

「おばさんは此の間の夜来た人でしよ」

孝次はさっきから聞きたくて仕方のなかつた事を聞いた。雪子は一寸微笑して

「知つてたの？」

「ウン——山間の農家から見て居た」

「そ——ヌ」

「本当に秋知さんの御好きなの？」

雪子は一寸驚いた表情をして

「マツ——此の子は」顔を赤らめて云つた。

「おばさんが帰えつた後石秋知さんは笑して居るんだと云つて泣いて居る」

雪子は秋知の事を話して居ると何かきまりがつたので話をごま化してしまつた。そうして唄い始めた。

何處、行くか、
春の御神
何處 行くか ！
山さえ、野こえ、海山こえて、
みぞれ降あく
落の里え、我は行かん

哀愁必滅せた、ソプラノは座の中まで響えた。唄い終ると又たく嬉しい表情をして立上かり、ハンドバックから一通の厚い封筒を取り出して、

「これ秋知さんが帰えつて来たら渡して呉れ」

云いながら百円を孝次にくれた。

「もう帰るの？」

「ええ」微笑して答え

「本当に夜して呉れ……おやたぶんなら」

雪子はぐちゃ〳〵の道へ消えて行つたが又振返り度の所でふりかえり微笑しながら手をふつた。孝次は名りの嬉しさに大声で叫んだ。

「何處へ行くの……」自分でも訳のわからぬ事を叫んで居た。

孝次はお年始を持つて、伯父の所に行つた。雪が朝日に反射して目が痛かつた。まだ雪の残らないお寺の石段は雪におおわれて朝日に照りかえされ桃色に光り美しかつた。孝次はその石段を昇りきると、新年の村を眺めた。麦畑や防風林その他あらゆる景色は真白な世界となつて横かつて居る。海から昇つた、太陽は真赤に熟え。雪におおわれた部落や村をやわらかい光線でつつんで居た。本堂の所まで来ると正面で秋知が居なかつたと小坊主達の中に割込んで居なくなつた秋知を聞いて見たが誰も潜然として孝次は満足の得る答は無かつた。孝次は、お年始のみかん箱を放り投げ、秋知の部屋に行つた。が居なかつた。そこでふと視線を机の上にやると、一枚の半紙に太い筆字で「秋知、求める万物の御教に為す無」南無阿弥陀佛」と書かれてあつた。孝次はそれを読むと人の世の悲哀を強く感じた。秋知さんは空虚な世界に運命を賭けて出家して居たのじやないかろうか、精神統一なんて自然な人間の錯覚だと思つた。そんな事を考えながら本堂の所へ戻つて来ると弟子の一人が西の方に足袋かすうと続いて居ると教えた。孝次は一番先に、その足袋を追つた。足は梅林をこえ、村をこえ、野をこえ、果しなく続いて居た。孝次は、荒涼とした。山の途中まで来ると、悲しくなつて

「秋知さ——ん何處へ行くんだよ、何處に——」

その声は空虚しく雪におおわれた、野山にこだました。その頃には淡い光つて居た。

十一月二十九日

PM十一時　しばらくして疲労

初恋

塚原正夫

僕がいつまでも子供の様な気がして仕方ないのは、家にばかりいるからだと思い始めた。僕は、知らぬ土地に行く事が一ツの楽しみでもあり、矢張社会人となる為には他人の所へ行けば良いと思いこみ、その様な父に話して遥るばる新潟県の或る硝子工場へ来た。

最初は友人と言う友人もなかった。その時に目上の人達とも話をするようになって来た。工場の三浦くんと言う一人の職人が、僕に何つて、どうせい、旅に出た時と今の気持とは？とたづねた時、僕はその返事に迷った。でも何んだか一日一日が何んとなく物足りないようにも思えるし、又、大人の気持になった様にも思えるとも答えた。

その後、二、三日たった夕方だった。空には星が出ていた。美しい不安な感じのする夕方だった。工員の一人、山本くんが仕事をすませてから、やはり同じ工場の女工さんである玉子さんをつれて、信濃川の堤防に添うて川上方へ、誘なこっちも含んだ笑いを交わしながら、手に手を取って歩いて行くのを、僕は一段と高い山の上に在る工場の二階の窓から映画を見てゐるつもりで見ていた。微笑ゆ。それに強く気持を惹められて、僕もあの山本くんの様に女をつくり、きっと二人で歩いて見せると、密物をしまい　遂に、ぐっと心におしこんだ。僕は其の晩山本くんの顔を、出来るだけ可愛い顔で覗みつけてしまった。

仕方でも何を怒っているのか、よく解らずに怒っていた。僕に頼まれたので勇ったような山本くんは

「君、年は幾つだい？」

と聞いた。今年の七月が来ると、僕は十九才になる。廣か其の言葉と、山本くんは

「君も年頃だ、気が向いたら女を持ってみな色々と分るさ、でも、男には仕事が一番大切なんだぜ」

と坐り直して言ったので、僕はフウとため息をついて

「山本さんは面白い人だね」

と言ひ、二人で笑った。

それからと言うものは毎日仕事をしていても女の人の顔を見る度に、この女は少し美人とか、男にとって何か満足を与えてくれるとか思い女に何つてついあの甘い言葉を掛けたくなる様にもなってしまった。でも、はじめの僕につく女性はいなかった。いや、そうではなかったのかも知れない。ただ僕の思う通り自由になってくれる女性はいなかったという方が正しいのであろう。女なんてなんだ、或る時は僕はそんな事ばかりを考へた。僕が考へていたことは、みな空想かそれとも愛であったのか、分らなくなり、頭がくちゃくちゃになって、女の人を構ますには居られなくなってしまった。思わず、毒生、と口惜しかった。

……でも良く考えて見ると幸福そうな情景などを見た瞬間、頭の中に寂しさが、湧いて来る時が多い。僕は人が女を連れて歩くのを見て、ただ羨やましく思うばかりなので自分は物事を余り簡単に考へ過ぎているということを知り始めた。きっとあのように仲の良い二人きりの雨降になる前には、何か、大切な事がある。僕はそれを考えず、余りにも軽快過に、人の真似をしたがっていた。後の、風の、に遅きなかったと、自分で今迄の自分を笑ってしまった。その笑いは山奥の晴間に、る時のような淋しい気持からだった。女は皆々で迷惑かった。いまや僕の傍に近づく日を光らせた爆進に緩をめかされたようだった。

月日の経つのは全く早いもの、新潟に来て早くも一年と四ヶ月にもなった。一日一日仕事も上達し大人にもなった。後に出て一年あまり大

人の社会と、目上の人のやる事なす事が目に分り、手に取る様にわかつて来た。あろうん遠歩と言う事も、目上の人が話しておるのを聞いたり現場を目で見たり、しらずしらずの内に覚えてしまつた。

そこで僕はまず紙に職をつけて、真面目に仕事をすれば、彼女と言うものは、何人でも出来ると思えた。

その後三ヶ月経つた九月〇日の日曜日に、川上中学校の大運動会があつて、工場の友達四、五人で見に行つた。天気も良く、運動会にとつては、絶好の日和であつた。その日一日はかりは、桁南大人になつた車い気持を忘れて、子供の気になつて、赤勝て、白勝て、と大声を揚げて応援をした。午後になつて六年生の「ちよ」と称借りがあつた。

僕はよい天気なので、野球網子を被つていた。その内、用意ドン、の合図が鳴ると、同時に、兎のように駆けだした。すると一人の男の子が野球網子 —— と言つて駆けて来たので、借してあげた。その男の子が通よく一等に入つた。賞品に鉛筆と絵面を取つて来た。ところが僕の後にいた女が生徒の姉さんであつた。姉さんは僕に向つて、貴男のおかげで弟が一等を取れたのですからと、賞品をあげなければやと言つて、僕の顔を見上げた。びつくりする位に優しい声だつたので僕は何にも言えず黙つてしまつた。やがて、運動会も終り、皆んな、もう、家に帰える仕度をしていた。僕達四人友達四人で、その背の低い女性といつしよに校門を出た。生れて始めて優しい目付をしてみせてくれた女は、僕と正反対の道へ歩いて行つた。彼女の後姿を見た時、僕とよく気持が合うような感じがした。僕は何度も何度も、後を振りかえつて見た。少し離れてから、彼女はつさようならと言つた。

僕も手を振つてやつた。景色の良い霧根山の小道をボウかぬ地の方に、四五人で行きながら、彼女一人が声をかぎりにさようならと言つた。何度も後向いて歩いて行く姿を見て、自分も足が前に進まなかつた。工場に帰つて来ても、なんだか彼女の事が目に映り、忘れられない人の様に思えてならなかつた。彼はあの女にまた逢いたいと思つた。しかし彼女の家も、名前も、知らない。僕はただ茫然と考えこんでいた。誠る夕方仕事がすんでから疲れきつた体を、窓にもたせかけて、窓をあけると、さつきまで降つていた雨が止んで、星が出て居る。部屋に電灯をつけると、目の前の青梅の大きな葉の先から落ちる水玉が非常に美しく見えた。僕は絵面上げられるように女を思い出して、彼女に逢う手段について思いめぐらした。僕のある村は谷下だから、この前の女はボウかぬの方に行つたのだから、きつと原と言う村に違いないと思つた。そうだ、今度の九月〇日に原の小運校で、毎日新聞で持つて来る映画があると言つていたから、きつと、見に来ると思い、僕も行つて見ようと考えた。あの女だつて僕と同感だと思つた。ただ女は男と違つて口にだしたり大袈裟にしないだけで、同じ人間だもの、僕の気持はあの女性にも分るだろうと思い、自分の物になつた様な気がして、早く逢つて話して見たい気持で胸が一杯になつた。それは急かつまりそうに苦しい気持であつた。仕事をしていても、友達に

「君、はんたが気が、そわ〳〵しておかしいぜ」

「あ、さてはもうできたな」

と言われ、態度に現われるまでになつてしまつた。でも僕は、なにが、とただ口の中でごまかすばかりであつた。

やがて一月千秋の想いをして待つていた、九月〇日が来た。夜七時半からだと知つて早目に行き、来るか、来ないかと見ておると、僕と同じく、あちらこちらと目をしほつていた、あの女を人々の間から見つけた。女の唇には口紅がうすくぬつてあるように見える。僕はドキドキして待ちく女から目を逸ざけてあると、右の方から真中辺に坐つてその女は、誰か友達らしい人と話をして笑つていた。そして時々、後を振り向いていた。それを見て、僕はほつとした。始まるまで後の方でどうしてあの女の所に行こうかと考へ、暗くなるのを待つていた。二十分ぐらいたつてやつと電気が消えた。思い切つて女の隣の腰かけに坐つてしまつた。坐つた時、少し動かしかつたかもう度胸がきまつてしまつた。映画の画面が明るく光る度に、僕は女の顔を見た。三度目に顔と〳〵が合つて、

「あら、あの時の？」

「うん、そうだよ、今日で二度逢つたね」

と僕は小さい声で言つた。女は、

「よくまた逢つたわね」
と下を見てしまつた。僕は
「最初から、貴女がここにいた事を知つていたのですか、貴女の方に友達がある様でしたから悪いと思つて、側に近よらなかつたのです」
と言つてしまつた。余りつべこべと話していたので、女の友達が僕の方をのぞいたので、僕は顔を赤くして黙まつて正面を見た。画面では死んだ恋人がお棺に入れられて居眠りをしていた。暗くて顔などよく分らないからいいやと思つて、画面に目をやつていた。すでに物語は半分ほど過ぎていた。最初の方は全然見なかつたのでよく分からなかつた。暗く見てある内に、なぜか僕の足と女の足とが偶々に十字を組んで居た。僕は映画より足の方が気にかかつた。たまらなくなり足を動かした。すると彼女も足を動かし
「いいのよ、どうぞ足を延しなさいよ」
と言つたので、僕は此の人は優しい人なのだと思いながら、足の置場のない位にこんでおるからお言葉に甘え、では、と言つてそのままにした。
やがて映画が終り、電気がついた。女は僕に、下駄を取つてくれた。僕はなのなか気がきくなあと思つて何度も有難うと言い、出口に向つた。女は僕の後から来て、
「貴男はどちらの方なの？　余り遠の方では見かけないわね」
「僕かい？　僕は硝子工場にあるんだよ」
「硝子工場では、他国から来ていらっしゃるの？　私、原の愛子と言うの、こんどの休みの時にでも遊びにいらっしゃらない。きれいな家ではないけれど」　と最に笑いを浮べてそういった。僕はポケットに手を入れながら
「ふゝ、今度の休みにでも行かしてもらうよ。まだこの土地に来て一年そこ〳〵で、この土地を良く知らないのですよ。今度ともどうぞ宜しくお願いします」
「いいえ、為こそ遊台下請しで何んにもしらない者ですから、宜しくお願いしますわ」
僕は腹の中で愛子の良いことを言つてあるなと思つた。そうは思つても、
「では、行けたらお邪魔しますよ」

女は
「来られなかつたら、お手紙でも下さいね。原の二十一番地か山愛子と書けばよいのです」
と早口で言つた。僕が硝子工場の所を言わうと思つたら、
「貴男は硝子工場の誰っていへないいの？」
「僕かい？　硝子工場の北郷光男と言う者です」
すると愛子さんは
「貴男はこちらへ行くのですね」では又ね、さようなら」
とていねいに頭を下げてから反対の方へ歩いて行つた。
その後、一週間経って工場が休みになつた。でもどうしても彼女の家に行く気にはなれなかつた。手紙を出す事も、余り際え過ぎている気かした。今迄の自分の気持に比べて、自分でも不思議な風だつた。行くべきか、それとももう一度なんとなく逢うのを待つかと思案に暮れてしまつた。その日は遂々行かずに映画を見に町へ出かけた。
「僕はシネマ見ようと思つているんだ」
「では、僕もシネマを見ようか、ああ、時間かないよ、早く食べよう」
そして、何時のシネマに入つた。
次の日の昼に山本くんが、北郷君、ラブレターが来てるといって、持って来た。どうせ彼の姉からでも来たのだらうと思って受取って見て、びっくりした。あの愛子さんからであつた。仕事の落ちきでポケットに入れておき室へ帰って封を切つた。
拝啓
御免下さい。その後貴男様にはお変り御座いませんか。私も元気で毎日を暮しております。先日お逢いした時、貴男は今度のお休みに私の家に来られるような事を言っていたから、来るのかと思ひ、首を長くして待っていたのです。私、貴男の休みの日を分ってあるのです。それは、私の友達で貴男が工場へ入る前に行っていた人に聞き、工場は一ヶ月に二度休みがあるそうで、六日と二十六日なのを知っていました。
貴男は来られなかつたのね。

私、貴男様に女の名前で手紙を差上げて悪かつたでしようか？手紙を差上げたくて、とうとう書いてしまつたの。別に何も書くことはないのですが、先日から二度も逢つて、それに貴男は初めて逢つた時から、とても気持のさつぱりした人と思つていますが、貴男は一寸短気なところがある様な気がするの、あら、こんな事を書いて御免なさいね、でも私、本当の事を書いたのです。

私、貴男ともう一度逢つて色々お話をしたくなつたの。どうでしようか。今度こそ家に来て下さいね。私、貴男を好きになつてしまつたかもしれないの。あら、また変なことを書き、御免なさいね。でも今日のお手紙全部心に残つたこと丈、本当にそのまま書いたのよ。また〳〵沢山書くことがありますが、今度逢つた時にできるお話しをしましようね。

ではお体を大切に

光男様へ

僕は此の手紙を読んで、此の女もずいぶんはつきりしているなあと思つた。自分もはつきりしているつもりだし、まあ、人前ははつきりしていた方が良いだろう。ぬちゃくちゃやする事は、誰が見ても嫌な事だから、また、余りはつきりしすぎても人の気持を悪くすると思つた。

この手紙を成当の気持で書いたのだつたら僕も本当の気持で愛子さんに返事を書く事が社会人としての礼儀だし、又、僕の今迄思つていたことが実証するかもしれないそう思つて早速返事を書いた。

拝復

先日は長しきお便り、本当に有難とう御座いました。僕は本当に嬉しくてたまりません。貴女のような方が僕の居たつた一人あるような気が致します。どうぞ、今後も今の気持で附合つて下さい。

僕は貴女に愛されてあるのか、光栄にうれしゆう御座います。愛されて、本当にうれしく感じる事の出来る女は他にないと思います。

僕は幸福です。けれども、貴女には もつと好きな人がいるのでは御座いませんか。そうしたら、僕は初めから貴女様と逢うのはやめます。いやらしい事のない、たつた二人だけの淋しいお話しとう御座います。どうぞ僕を愛しているのでしたら、他の男に親切にしないで下さい。貴女に僕は女王のような資格を持つて貰いたいと思つております。どうぞ、今後もその繋りでお附合をして下さい。それにしても、貴女様と一度、目の前で話をはつきりしたいのです。どうでしよう、十月〇日の晩、七時頃に僕の工場の裏に来て下さい。

ではまた逢う日まで。

光男より

愛子様へ

僕はこの手紙を出してから、どうも初めての事でもあるし、なんとなく気恥ずかしい気がした。

"そうだ"。僕らはそういつも逢える様ではない。家も遠いし逢えない時は僕と合つてある気持がするものを差上げておこうと思つて、十月〇日僕は或る商店でコケシと言に捧げる十字架を買つて来ておいた。

一週間位は何も忘れたように、ただ仕事に励んでいた。なぜかもう僕の準備は済んでいる様に気が落着いて、なつとした雰囲気をしてある気分だつた。果して、あの女は僕が思つてある以上に思つてあるのどうかは分らない。約束の前夜は明日だないと思いながら出てしまつた。

其の日一日の仕事も、無事に終り、社長の用事で僕は昼日まで行く事になつて居たので行つた。行く時に考える暇しさが段に浮べ、心に抱いておつた。帰り道は、僕の足は、急に速くなつて十分で歩く道を五分で歩く様な速さだつたなんだか他人の足が歩いているようであつた。

やがて工場の前まで来て時計を一歩二歩と歩あごとに、愛子さんは来てあるか、来てないかで、汗が流れていた。

愛子さんの笑顔を見た時は、汗は水の様に流れて冷たくなつていた。その後二人で工場の裏で、小さい声に寄りかかつて話を始めた。僕はポケットからあの前買つた物を取り出し、今日は遅々来て済きどうもすみませんね。今日はたしかに逢つたが、後はいつ逢うか知らないが、逢はない場合には、これを見て逢つたつもりで。と僕はおつきらぼうに言つて差上げた。でも娘女は手を出さなかつた。なぜ

受取らないかだとつめ寄ると、素直にではあの言葉に甘えて貰いておきますと、戻ってくれた。
彼女はさっそく首に十字架を下げて、とつてもすてきね、とさった。
僕もつられて 何分の首に同じ十字架を下げて、笑顔をした。彼女は
「私を本当に愛して下さるのね」
「うん、愛してゐる」
「私も……二人とも好き合ひ同志に育つたのだから、人に後指を指されないように、強い愛情を持つて、行こうではありませんか」
「僕もそう思います」そういいながら僕は愛子さんの肩に手をかけて
「君あの山を見てごらん」
丸い大きなお月様が、山の片側から今、出ようとしていた。僕の腕と彼女の胸には、白と黒との十字架が、月の光にひかつていた。僕はその時、神よ僕ら二人が早く良い生活の出来る日を與へ給へ、そうして僕ら二人がいつまでも良い人間で生活を出来る事を心の中で祈つた。彼女もたしかにそう思いながら、見ていたろう。彼女の目が宝石のように光つていたのだから

「僕は遅くなるから帰えつたら、僕、送つて行くよ」
「いいわ、私一人でかえるわ」
「でも、送つて行くよ」
「それじゃそこまでといいわ」二人は工場の裏道を抜けた。神社の両側は大きな大木にかこまれてシンとしていた。又しばらくお宮の周りを散歩した。すると彼女は、突然
「光男さん、私悪い女です」と立ち上つた。僕は突然の事で、なぜ？と大きな声を出してしまつた。
「光男さん絶対怒ってはだめよ、私本当に言つていいわ、実は私、今日の二十七日に東京に行く事になつてゐるの、男の人にこんな話しをした事がないのですが、義母様にはお話をしません」私も東京に行き、社会の裏を色色と勉強してくるつもりだつたのです。でも、貴男と散歩をしてゐると、行きたくなくなつてしまつたのです」僕はただ、あっそうでしたか、と言つた。彼女は私の言う事、本気にしないのでしょうか、と言う様な強つきで僕を見上げた。僕はでは今度、貴女の家に行くよ、

ところから帰るから気をつけて呉、と言つた。愛子さんは江田橋を渡つて、だんだん橋の向うの小さな小屋の方へ姿を消した。
僕は彼女の後姿をいつまでも見送つていた。なぜか僕は室に戻つても、彼女が東京へ行く事が本気には出来なかつた。僕は予定よりも早目に愛子さんの家へ行くことにした。
初めての家に行くので、恥かしい気もした。行く気になつたら、足が一人でにどんどんと進んで、思つたよりも時間もかからないで、早くついた。家の前で僕が立つていると、一度通つた弟が出て来た。僕はお姉さんがゐる、と言つた。家の中へ入ると、彼女が出来て、私と弟と、二人きりなのと僕を部屋に通した。
「お茶をいれて来ますから、さあどうぞ」
「なにもかまはないで下さい」と僕は言つた。
「一緒に話でもしましょう。僕は今日という日が嬉しいのですから、貴女も話をして下さい。まず、僕がお話をいたしますが」
「早くお話をして頂戴」
といつて笑つた。僕はすぐに話を始めた。

僕は貴女にだけは、何んでも申し上げることが出来るように思います。世の中には、男に生れて本当の喜びを味はう事が出来ない人が多いように思います。僕は神に感謝しないわけにはまいりません。人間に生れてよかつた。男に生れてよかつた。貴女に逢へてよかつたと思います。
僕が話迄で言うと、彼女が
「私だってそう言ひたい位ですわ、貴男と逢へなかつたら、なんの希望も楽しみもない私だつたのよ」
「いや、思体なさ過ぎる程自分は幸せがいいと思う。僕は貴女の東京行き、あの時は本気にしてはおりませんでした。しかし本当なら、僕の力でおとめして死ぬると思つておりました。貴女が僕に冷淡になる努力をすると、却つて僕は貴女を信ずることが出来ました。どうぞ貴女のお気持を変えないで下さい。
僕は貴女とこうして逢い、話し貴女と一緒に笑つたりすることや、此の世にこんな喜びがあり、人間がこんなにまで喜べるものかということを知りませんでした。知らない間は空

しいけれど、一度知った上はそうではけれは生きて行けない、ような気がします。僕の一生も名誉も幸福も絶りも、みんな貴女のものです、貴女のものになって初めて僕は、僕に成れるのです。貴女を失ったら、僕は僕ではありません。それは余りに可哀そうな僕です。僕はただ貴女の場にいて仕事を続け、貴女に僕の子供を生んで貰うために、此の世に生きていたいと思っています。」

「よく解りました」

そういって彼女は暫らく黙っていたが、

「貴男は先日私に、コケシと首に掛る十字架を下さったわね、だから、私はつまらない物ですが、学校時代に編った此の刺繍を差上げます」

と持って来た。僕は嬉しくて、彼女に有難うと言う事を忘れてしまった。

「僕が貴女に差上げた品物より、此の刺繍の方が本当に尊いものと言えますね。僕のあげた物は何時でも買えるものでしょう、貴女の物は自分で心を心めてのかったものなのですからね」

其の刺繍は、神社の入口に座が坐っている所である、だから、僕は彼女に言った。

「此の座の様に何時までも、貴女を思い続けますからね」

と二人で笑ってしまった。

愛子さんの家は町と違い、僕はどの見た事もない大きな大家柱があった。部屋は十畳と七畳があり、三畳の間が愛子さんの部屋になっていた。自分の部屋だけに、色々ときれいに飾ってあった。机の上を見るとコケシや壺があった。壺の間には自分の写真と僕のあげた十字架が光っていた。

「遅くなるから帰ってみる」

と言って外に出た。外は薄暗くなっていた。

彼女は僕の前に立って、では、と手を今して彼手をしようという潮をした。僕も手を出した。互いに握手をして顔を見上げたら、僕を見てキスの事を思い出し、僕は彼女に寄りかかってキスをしてしまった。彼女は僕のするままに、寄って立っていた。僕には愛情はあったが、余り

No.

御問答に入れぬもので心苦しいものなどですが、長い間で見てみて下さい。必ずや、内心のマジメな声もございます。

△昭和卅一年一月十四日△

尼子愛

(15×10)

尼子会

「風城」原稿用紙

しいけれど、一度知った上はそうではけれは生きて行けない、ような気がします。僕の一生も名巻も幸福も尚りも、みんな貴女のものです、貴女のものになって初めて僕は、僕に成れるのです。貴女を失ったら、僕は僕ではありません。それは余りに可哀そうな僕です。僕はただ貴女の場にいて仕事を続け、貴女に僕の子供を生んで貰うために、此の世に生きていたいと思っています。」

「よく解りました」

そういって彼女は暫らく黙っていたが、

「貴男は先日私に、コケシと首に掛る十字架を下さったわね、だから、私はつまらない物ですが、学校時代に貰った此の胡桃を差上げます」

と持って来た。僕は嬉しくて、彼女に有難うと言う事を忘れてしまった。

「僕が貴女に差上げた品物より、此の胡桃の方が本当に尊いものと言えますね。僕のあげた物は何時でも買えるものでしょう、貴女の物は自分で心を込めてかかったものなのですから」

其の胡桃は、神社の入口に腰かけている婆で、ある、だから、僕は彼女に言った。

「此の底の板に何時までも、貴女を慕い続けますからね」

と二人で笑ってしまった。

愛子さんの家は町と違い、僕はどの見た事もない大きな大黒柱があった。部屋は十畳と七畳があり、三畳の間が愛子さんの部屋になっていた。自分の部屋だけに、色々ときれいに飾ってあった。机の上を見るとコケシや変かあった。壁の間には自分の寄贈と僕のあげた十字架が光っていた。

「遅くなるから帰ってみる」

と言って外に出た。外は暗くなっていた。彼女は僕の前に立って、「では、」と手を差して握手をしようという潤をした。僕も手を出した。互いに握手をして顔を見上げたら、唇を見てキスの事を思い出し、僕は彼女に寄りかかってキスをしてしまった。彼女は僕のするままに、寄って立っていた。唇には接吻はあったが、余りも彼女が黙って立ってあるので、唇が震え、体全体が震えた。月夜の晩で、腕時計を見ると十時頃だった。彼女の家の前の柳の木の下で二人が抱合った時の空はきっと星がありと僕と愛子さんを見たかも知れない。

工場へ帰る途中で、胸騒ぎがしてたまらなかった。どうして僕はキスなんてしたくなったのか、又、彼女はどんな気持がしたか、僕には分らない。頭が痛くなった。

僕はこれで愛子さんに捨てられたかも知れない、あるいはこれで二人の心は石のように固まったかもしれない。いや僕の気持は一時に変ったのだから、矢張捨てられたかもしれないと下らないことを考えて工場に帰ってみると、なんの事だ、家から速達が来ていた。早速読んでみると、今年中に家に帰って来いとのこと。僕はこの時、家へ帰るのが嬉しいような気持がした。でも反対に何か淋しくも思った。きっと愛子さんの家から帰る途中、下らないことを考えたからかも知れないとも思われた。家に帰らうと思った僕は、なぜか彼女の事が忘れに思われて来た。これまで交際をして来て、僕が家に帰った時の女は誰もだろう。僕から係者されたと思うだろうと考へずにはおられなかった。僕はこれを思うと、もう逢う事さへ考へられないようになった。

一月ほど手紙を出さず放って置いた所が彼女からの手紙が来た。嬉み涙もにつれて、僕を愛してゐる事が充分に分った。

貴男はお手紙も下さらないかどうしたのでしよう。私でも悪いのですか。私、心配です。此の手紙の着き次第返事を下さい。それとも私を嫌ひになってしまったわけではないでしようね。私、自分でも貴男の思うようになれない女だと思っております。貴男が私に言って下さい、私、貴男が言う通りになります。私は貴男のトリコです。貴男は他に女性が生まれたのでしよ？私、若かあったら貴男の所に飛んで行き、夜明けまで見守りたい位ですの。いや、貴男はそんな事をする人じゃないわね、そうね？そうでしよう？考えると、私、

激しくて起ても立つても居られないような気がするの。でも貴男に載いた十字架を見て、元気を取り戻しております。貴男は私にキスしたので、私が変に思っておるとでも思っているのですか。貴男はそれな絶の弱い男ではないでしょう。却ってあの時、貴男が私をこれほど愛して下さっておると思って、貴男と二人で天国へ昇って行ったようだったのよ。当局、愛情が互に通じたとも言えると思います。おかしな事ばかり書き、御免ね。

私、五六日に貴男の許に行きたいと思うの。

ではお元気で。

光男様　　愛子より

僕は此の手紙を読んで返事を出し、あと五六日後に彼女が来ると言っておるから、十二月二十八日で帰ってしまおうと思った。しかし、僕はなぜそうしなければならないのか自分でもよく分らない。僕は家に帰ることは厭くし、家に帰ってしまえば、それで一時別れるするか、それでもよいのかもしれない。しかし、今度逢って色々話をすれば、彼女も僕も別れかつらくなる。それより、僕が彼女に手紙を出しておいて遂りずに帰った方が、あの人は好手な人だ。案外見かけにならなかった人だと思えば、彼女は僕から離れるのに一番早いと思ったからだ。僕は何故こんなことを思ったか。それは僕が家に行ってしまったら、つまらない淋しい日を送る可哀想な愛子さんになってしまうからなのだ。さんなにみじめにするのなら、僕は愛子さんに早く忍めれてもいいから、そうしようと思った。その方が愛子さんは幸福になれる。ともかく僕は手紙を書く。

別れの手紙

舞巻

貴女の下さったお手紙で、僕は貴女の心の中をくぐって歩いて来たように、はっきり分りました。僕は嬉しいので、今死んでも貴女のお言葉が頭に入ってある内は、貴女と別れたくないと思うのです。しかし、貴女には申訳がないのですが、此の前貴女の家に遊びに行って帰って来てから、家から手紙が来ていて、今

年一杯で家に帰ってくるようにといって来たのだから、どうしても帰らなければならないのです。ともかく僕は新潟を去り、家に帰って仕きます。僕は貴女に頂いたキスとあの神社の前に坐っておる高の刻印は、僕の愛の苦ひと悲しみとも同時に消滅することが出来ると思っています。貴女のために、僕はそれほど弱い男ではない。ただ、貧乏な僕なのです。

「貧乏な人は嫌い」　とまさか貴女は言わないでしょう。しかし、僕が貴女に綺麗な着物を買ってあげたら、貴女はとびあるほど喜んでくれるに違いない。その喜び方をする時の女の顔を見たいという欲望は、男は誰でも持っておるのです。僕だって持っております。しかし先立つ物の金がなければなんとも仕方がないのです。出来なかったことは仕方がない。

僕は貴女を僕みたいな男と交際させて可哀想な女だと思っております。でも、これ以上の同情はしたくないのです。貴女のためを思うからです。僕自身も貴女から同情して貰わなくても、別れたのちは絶度さつぱり私の他人でありたい。

勿論、此の手紙は平気な心で書いたものではありません。僕は手を震わせて書いたのです。これを読んだら貴女はなんと思って泣くでしょうか。

暗く別れるはかない初恋でしようか。お許し下さい。

では、さようなら。永久に。

光男より

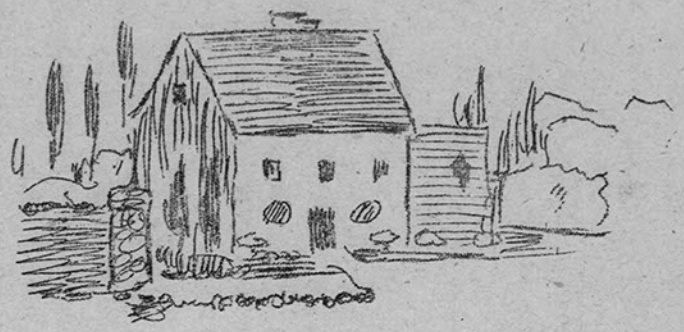
愛子様へ

僕が此の手紙をポストに入れて、二日経った。その二日目の午前中に家に向った

（終り）

風景

南雲勝彦



武武は僕の中学二年の時である。

間もなく新学期になった。

隣村の地内にある町の中学校の校門を、ゲートルをとった中学生達がそろそろ入って行く姿好は、僕にはみんなかひどくさっぱりになったように見えて仕方がなかった。歩く度にズボンがヒラヒラと足首にまつわりついて、なにか金魚の尾のようなヒラヒラした飾りものがついている感じで僕は嬉しく思った。然に配属将校がカーキ色のズボンに赤短靴を踏いている姿は、丸で村役場の小使いのようにみすぼらしいのだった。

僕達は夏休みの校庭の芝生にだらしなく寝ころがることを想えた。空が蒼のように澄んでいて、浮んでいる白い雲の長閑さをうっとりと吸収した。秋風が吹いた白いか深お校庭一面に、絵でもない思想が新しい希望のように広まって行った。僕達はみんなのびのびとそうな顔付をするようになって、学校の授業をひそかに軽蔑した。授業に熱意のない国語教師の退屈そうな講義などは、本物のように聞へられた。僕達はなにに手をつけてよいのかさっぱり見当がつかなくなっていたのである。

防空壕の中で叫も長く大きな声を張りあげてみたり、突然走って行って芝生の上に空中翻回を試みたりして、憂鬱から救かり落ちそうな危機感をひそかな領域的な快感にすりかへてゐた。人一倍感覚な僕は、漠然と見え

始めて来た僕の中のも一人の僕に向って、お前はまだほんの生れたばかりの柔かな芽なのだから、おっとしておなければいけないと言ひ聞かせた。純粋！という宝石が内部で結晶を始めたと思ひこんだ僕の頑固な楽観は、当時の僕を美しくあらしめるための信念に他ならなかった。のである。

中学校の南側の田の中に、こんもりとした森がある。松樹科の樹木が其の内部に繁茂のいた瓦宿さをかくまってゐる。常光寺といふ小さな寺の領分である。

僕達は学校帰りに誘ちかけた山門をくぐって、古びた墓石の間を散歩した。つつましやかな沈んだ匂ひが僕達の鼻をくすぐった。

お寺の庭は掃除のない落葉に埋めつくされてゐた。当るなくぶらつく僕達の鼻先へ時々落ちた一葉は気まぐれに舞ひ落ち、猫一歩進めば足の下はかさこそとこそばゆい音をたてる。仲間の誰か一つの足は、落葉をためしに踏つてみる。すると後から一斉に飛び散って、其の部分に乾いた地面が元のように顔を現すのである。

夕陽、西に傾いた太陽が鋭角な樹木の間から黄ばまの光を憂鬱一帯に投げかける頃、自エプロン姿の麻の大きな掃除人が、散石の上の落葉を掃き始める。それは山間の谷に集められて火がつけられ、焦げ臭い煙が寺全体を万遍ない夕霧のように包みこむ。落葉の間をかき分ける箒の小さくて白い足は、なまめかしい魚のように見えた。僕達は何か言葉をかけたくて、大人のような天候の挨拶をすることもあるし、彼女が落葉の中にまぎれこんだ落葉を軍隊にとり出して焚を消してから、今掃き集めたばかりの落葉の上へ身を投げこむこともあった。

お寺に落ちる夕陽を僕達は決して好んではなかった。同じ夕日を見るならば、女学校の裏寺にある山の上に立って、白らもその斜陽を全身に浴びたいのだ。木と木の間からもれた細い光線と樹の木の間からもれた一つの細い光線とか僕達の目の前から合って、ケチな宝石がなんぞのようにきらきら光って見せるのは、全然お気にならなかった。

山の上から見る一日の太陽の臨終はきっと落るべき悲哀さがあるに違ひないと思ひながらも、

僕達は山には登らなかつた。女学校の寄宿舎を見下ずためではなく、遠目を見るためなのだといふ言ひ訳さこしらへるのが、僕達には癪神でややこしいことに思はれた。

女学校の裏山に沈む、あの秋の大きな橙色の円盆は、そのまま僕達の夢だつた。

墓地の秋の夕暮は、徒らに石塔の影が長いのだ。野生するコスモスの影が複雑に入り組んで、淡い花の色が淡いなりに鮮やかになつた。

そうした夕暮に僕達は一人の女学生が、或る墓場の前で祈祷してゐるのを見た。幾つも墓場をへだてて居たが、石塔の陰に赤い力バンがあるところからみて、彼女は遠故郷りでもあるらしい。胸元の白いスカーフにかくれた故郷がスカーフが風にひるがへる度に眺く反射した。

彼女は僕の近所の捷徑屋のM・Tであつた。

「M・Tぢやないか。きつと彼女は姉さんの戦死した許婚者にお参りをしに来たに違ひない。僕の記憶では姉さんは必ずしも美人とは言ひ難いが、それでも相当に綺麗な方に違ひない」

僕はそういう事を言つて仲間を興奮させた。MTは美人だつたので、彼女を見た日は僕はしばしば受験にとらはれてゐたのである。M・Tが足早に去つたあと、その墓地へ行つた僕達は新しい木碑の前に、名の知らない花が供へられてあるのを見た。生花の傾向に用いた故郷を学校帰りに墓前に供へる心掛を僕はひどく心情いものだと思つた。

僕達はこうした雰囲気の中にばかり安住してゐたのではない。其の憂鬱に、此のお寺に僕達は働き始めて来た。ただ実行出来ないことは僕達の血を湧かせたので、お寺に相談をかけて荒妻の娘である小学三年の美女を拉つし去つて山岳にこもり、僕達は山賊を生業にしてから美女を育て、将来は共同の妻にしようではないかと真面目に話し合つた。

それから間もなく僕達は小さな墓石をしたのである。石塔を倒すのである。次から次へと倒すのである。何の理由もなかつた。小せ印の前をくぐり抜けて、僕達は母の墓塔を敢行兵のようた一日故に逃げて行くのだ。石塔倒しは数日前の短い命だつた、いつ祟るかこいるのが僕

達の期待であつたので、校長室では呆れる程に素直であつた。猫子宮に西日が静かにさしてゐた。校長は熊のように室中を歩き回つて、窓の所に立ち止まると、放課後に彼と一緒に常光寺住職某々氏の所へ僕達を同行すると不気味な位おごそかに言ひ渡した。僕は思はず顔を上げたが、校長の悪痛に歪んだ顔が見えたので、前よりも更に深くうなだれた。

校長に連れられて校門を出た僕達は、お寺の森を見た。森からは一条の煙が夕陽の中に伸つくりと漂よつてゐた。僕達はあの荒妻が白い足袋をひるがへしながら落葉をたいてゐるに違ひないと思つて、やるせない想ひだつた。

お寺に近づいてみると、僕達は其の煙を思ひ違ひしておにことが分つた。死体を焼く、あの胸の悪くなるような匂ひが、僕達の鼻につーんと来たのだ。校長の眉も思はず震つた。荒妻のたく落葉の匂ひは如何にも秋の夕暮にふさわしいもので、こんな生息いものでないことを僕達は知つてゐる。其の悪臭の匂ひは僕達をひどく心弱くさせた。

僕達は荒妻の私室に面した庭に並んで何度も頭を下げて、其の度に彼女は親しみ深い微笑を浮べて、住職が帰宅したら彼女からうまく取なしてやると、内輪な態度を見せてくれた。荒妻の白い頬は夕暮れの中で、重い花のようなあのなので僕は校長の黒い背広の肩越しに何度も盗み見て、背の低い親地の住職をひどく不潔なものに思つた。

……僕達は暮らくいら〳〵とした日を送つた。午後の授業も全部出席して、奥歯ぐにそれぞれの家に帰るのは不安で淋しくて堪えなかつた。

僕はぼんやり捷徑屋のM・Tのことを考へた。

彼女は細と長かい小さくてやせてゐたので、僕は非常にスタイルがいいと思つてゐた。それで彼女とすれ違ふ時は出来るだけ無関心な表情で彼女の顔を見てやらうとするために却つておどおどとした。そういふ日は異様に興奮して文章を書いたり本を読んだりするか、すぐに憂鬱な気分になるのだ。同じ女学校に行つてゐる僕の妹に、それとなく彼女のことを聞いて、僕はい

らさる歌をかいてゐるような嫌な思ひに襲われた。妹と僕は一緒の室だつたので、僕は口笛を吹きながら物思ひに耽るように心かけた。物思ひの内容が女であると我に帰つた時には、殆んど自分のモモに針を突きさしてやりたい位に思つた。美しくありたいとひそかに願つてゐたので、そのありようが根へられないままに自分を変にして置きたかつたのである。

毎日々々が新鮮な不安であつた。妹の話によれば、M.Tは卓球に熱中してゐるとのことである、そんなことまでが僕をたまらなく不安にした。

夜更けになると、僕は散歩を装ほつて提燈屋の家の前を行きつもどりつした。二階の千鳥格子にM.Tのあの下卑がかほんやりと映るのである屋根からの風が冷たくなつてゐたので、早くから障子がしめられてゐた。

……僕は恋文という奴が欲しくて仕様がなかつた、それは実に神の国から来るものと信じてゐた。

あゝ、だが僕はこんな悲念にはかり熱中してはゐられなかつたのだ！

買ひ出しである。父が前もつて連絡しておく近在の農家へ行つて、自転車の荷掛台に米俵をのせ思路を帰つて来る事は、僕をすつかり不気嫌にしてしまうのだ。MTの恋文も神の国もたちまちのめして、僕はまたたく間に厭世的になり果てる。

どの農家も揃つて穏和な顔をしてゐた。年をとらした婆さんも、ない子供の親なども揃つて、「坊や、大きくなつたらなにになるの？」と訪ねてゐる僕は、丸で買出しが楽しくつて仕様がないというように明るく明るくと愛めるのだ。その代りっ勉強が商売へ米をつめるために御屋へ入つたあとで、僕はわざとらしく大きな欠伸をするのだつた。偶然に其の家に年頃の嫁が居る時には、ぢつつりと押しだまつて、自分自身をひどく軽蔑してゐるかのように肩をしかめなければならなかつた。

自転車で走る田舎路だけ僅かに楽しかつた。刈りつくされた広い田の面を、泥の匂ひを含んだ冬の風が冷たかつたが、高台の自分の町の数々をながめながら口笛を吹く、町からの石街道に

は江戸時代の名残りである元城が後にまみれて立つてゐた。その大い幹の傍に自転車を止め、犬のように片足をあげて立小便をしてみることもあつた。そうした木の幹には時折、とてつもなく巧妙にデフォルメされた女性の形が彫りつけられてゐるものである。樹木自身の栄養によつて、こんもりとした肉感的なふくらみさへ持つてゐるものもある。度重なる買ひ出しによつて、どの街道のどの木には、どういう作品があるかということを僕は続えていてしまつた。かそれらは殆んど似たりよつたりのものでしかないので、必ずしも魅力的なものではあり得なかつた。それでも小便かそのみぞを伝つて松の根方へしみて行くのは、なんとなく僕を見つめさせる力を持つてゐた。

背後に重い憂鬱な荷物を乗せてゐるというふ何かしらうづくようなやましさにおびえながらも、僕は流行のッリンゴの歌ッをよく口笛で吹いた。此の歌はひどく流行してゐた。此の旋律に似つかはしい軽快な希望など、生活の周囲には丸で見つからなかつたが、買ひ出しの帰りにはなにかふさわしい感じがした。

町の入口のだら〳〵坂にさしかかると、僕は自づと緊張して来る。知つてゐる人に会ひたくないからである。裏通りを走りながら僕は何かに対しておど〳〵としなければいけないような気がかき立てられてしまふ。僕はこんなにおびえてゐるのだから皆さん許して下さいという気持を出来るだけ早く表現したかつたので、道路に水たまりなどがあると、その中へ自転車を乗り入れて、車輪も自分の足も泥だらけにしてみせたりした。

さういふ風にして家へ帰つた僕は、さまつて母の前にひそ〳〵とした後しさに対抗するように僕は不気嫌に荷をおろしてゐた。

夜道に乗じての買ひ出しも度々である。街のあかりの中を大きな荷物をつけて素晴らしく激しいスピードで自転車を飛ばす時には、僕は何か黒い犯人でもあるかのような不気味な興奮を感じた。道が丁字路に分れる蛇点のいかめしい警察署の前を静つて走るのも夜であつた。被害妄想になつてゐる僕の頭は、荷物

白の薩摩芋を大金塊と思ひこむことに県命になつた。自分をヤヤング団の一味になぞらへることは、僕が買ひ出しをする時の精神的な支柱になつてゐた。

食糧事情の逼迫はそれでなくとも崩れかけてゐた教師の权威を地やたにたたきあとす結果を生んだ。

僕達の担任教師のタコは、僕の家を一週間に一度づゝ家庭訪問して闇米を扱つてゐた母と寄越をするようになつた。彼は自分の試験の失望を僕に試験の採点を手伝わせることによつてごまかした。僕はタコの家の濁り茶の前で、いたづらに大人ぶた微笑を強得したのである。

タコの家へは夫人の従姉妹であるヨシちやんが時々遊びにやつて来た。彼女は結婚生活一年目の戦争未亡人である。生後一年位の女の子を抱いて来て、夫人と果てのないお喋りをしてゐた。よく泣く人であつた。泣く時に大きな目が生き生きとしてくるので、泣き出すぞと思つてゐると輝きが頂点に達して水滴が浮ぶのである。背の高い腰の細い彼女は、その後姿を見た男と錯覚して、後と一年後には南方戦線へ送り出したとのことである。僕にはヨシちやんがあのMTに似てゐるような気がしてゐたので、彼女が明るい声をかけながら入つて来る時や帰る時の立姿さなんとなく見つめることが多くなつた。

ゐる日、彼女は夫人にこんなことを言つた。

「此の浮生さん、あの人に似てない？」

夫人は暫時に笑つて答へなかつたが、僕はうつむいたまま探偵に熱中してみせた。彼女のあの人に僕はぼろ酔ひになつて、顔を見ることが出来ないのである。

MTに似てゐるヨシちやん、あの人に似てゐる僕――タコの家の濁り茶の間へ入る度に、僕は此の偽者同志の組み合はせをきりめて口マネスクに言へるようになつた。其のために僕はヨシちやんに帰つ気なくなつた代りに、彼女の子供に親切になり膝に抱いて柔かな頬にアバアをしてやつた。子供はすつかり僕になついて、週らゐ名で僕に話しかけた。

「ずいぶん子供がお好きなのね、若いのに珍らしいわ」

これは誤解といふものである。

ヨシちやんに僕の心――その実体は一体何であるのか分らないながらも、矢張其の僕の心を知つてゐらいたいと思ひながら、其の心をクロスワードパズルのようにまぎらわしくしてしまつたのである。恋はつまりはそのクロスワードパズルを解いて行くことに他ならなかつたから、ヨシちやんが其の迷路に踏みこんだと思つた時、僕は自分に誤解を強ひた。「ヨシちやんは僕を好いてゐるな」と

僕はあの人になりたいとは思はなかつた。

彼女がなんとなく僕を見つめてゐると感ずる時、僕の顔にあの人を刻みこんでゐるかのような、鋭い痛みを感ずるのだつた。

或る夕方であつた。夫人が席をはづした時、ヨシちやんは火鉢にかざした僕の手を暫らく握つてゐた。彼女の顔は変に生真面目になつて、火鉢の炭に目を落したままで言やいた。

「あなたつて……本当に似てるのよ」

ほんの短い時間であつたが、僕は首をしめられて行くような錯覚を感じた。僕と彼又は今から暗い谷間めがけてあるあろうは倒れこんで行く矢先の、淡いめくるめきを分ち合つてゐたのだ。

人生をロマネスクにするための此の偽者同志は。

（つゞく）

朝霧

石動利治朗

若い男は歩いてゲイマイ屋の裏門を出た。

「じゃ、気をつけてね」

表せぎすの顔色の悪い娼婦はしかけない朝霧のまゝで、玄戸の蔭に立つている。何十人前は何百人の男を、全く機械言葉で送つたかも知れない通り一ぺんの挨拶。あるゝ男は、それ以上のものを求して期待していたのではないか、それとも、その背後の夢に、のつと、衰知られたと云つた様な、かすかの失望は持つた。少くとも、昨夜の女の言葉や態度の一つ一つは、丁度その霧の様つぽい濃霧の色の様に、ぼうっとかすんで色あせて行くのが分つた。

男の顔に、悪い疲労の色と、白朝のかすかな怒いが浮んだ。

（やはり、死ぬしかないのだろうか）

昨夜から、否まつと以前から、漠然と恐れ抜いた、且かに其の中に秘かに求めていたと云える、気弱い男の持つ必要以上に自らを追つた思い。男の目を不気味な程空ろなものに見せている。

まだすつかり明けきれるには早いこの小さな田舎町は、森閑や宵うちの激しい活気を、遠いとはりの夢に忘れた如く、あく迄も静かである。カタコト、カタコト。

やがて、近くの農村から出て来たらしい肥上げの荷馬車か一台、男の

数前二十米程の大通へ出て、その馬車の後について歩いた。

健康そのものと云いたい逞ましい農村の若者が眼前に居る。頼んでもある肥荷は新しくて清潔そうだった。

男は、この農村の若者の表情の表情そうな肩幅の背に、心中秘かに、かすかな羨望と嫉妬を覚えたか、やがて男は、それが自分の中で激しい自嘲と自虐に変るのを恐みしめたら、一層うつ向き加減に、固い機械道具の片隅を、黙々と歩いて行つた。

西南方数百米の上空に、今度は白い煙が散つて、花火が上つた。乾燥期後を告げる花火であつた。

男は今まで垂れていた頭を上げ、その消えかかつた煙を、目で追つた。手は外套のポケットに入れたまゝ、使い残つた数くちゃの札を握りしめている。千円札が二枚、それが男の今の全財産であつた。――とすると、昨夜一晩で八円なにがしの金を使つた勘定になる。どうしていその様な浪費の出来る筈分ではなかつたのだが。

男は改めて、自らの今までの持つた行為か、もう二度と取返しのつかないそれであることを思つた。死――今までも漠然と考えていたその観念が、男の頭の中で一層激しく渦をまいていつた。

だが男は、本当は自分が死を思つている表面いとく死を恐れていることも又知つていた。確れに似たヒロイックな倒錯感はあり乍ら、一面今のまゝで死を選んだ場合、所詮物笑いの種にしかならないだろうと云うことを考えると、男はたまらない悲しみと闘えて焦りを覚えるのだ。

そんな男に、花火、一つの表を、知らせて呉れている。

どうして昨夜は、と云うより最近は、こう迄荒みきつてしまつたのだろうか、思えば、男は近なりに、自分を納得させ得る自信は持つた。弱気と人は言うかも知れない。いや、神経衰弱なのさ、酒、社会が悪いのだ。

だが、男の最も恐れることは、自分が店の金を少しづゝ使い込んでいると云う罪悪感だった。

何故なら、もし自らの命を断つ場合、男のもつとも気にかゝることは、自分への評價なのだから――。理性では、死んで了う以上どうでも良いことだとは思へても、やはり死後残まれるよりは少しでも公表されたいと男は思つた。そのために男は、出来るだけそう仕向けて書いた遺書を、氷夜一夜の猶予に先立つて遺して置いたのだ。

遺書は要約すると、次の様な書、のものである。

最近健康上の自信を失つて来たこと、復員以来常に空虚感に悩まされ続けたこと、肉親と縁て戦争で失つて、一人身の下宿住いをしていたのが、一層に応えたこと。又自らの性格上商人向きではないこと。しかし復員以来五年も経過初めをして、今更他の職につく自信はないこと。

男は、便箋十枚程のその遺書を、出来るだけ美しい文章とするために、三度も書き直していた。そして最後は、書き作る為にも自分いとほしさの為に涙さえ流したが、三度目にかゝる時にはやゝ倦きて、バカ〳〵しいという気持もほんのゆゝしく思いた。何よりも三度も書き直しているうちに、自分が決して本当のことを書き遺していないと云うことが、強く心に残つたのである。

なる程、健康上の自信を失いかけていることも遺ではない。医師は強壮剤の初期だと云つた。復員以来の空虚感も又公表である。男には現在は勿論、現在までの間も、世間の人々の行為は全く無意義に見えていた。不満のない美しい生活は自分であることを、男は四六時中意識しすぎているのだった。一人暮の下宿住いは、男の必要以上の内省に満ちた孤独感をつのらせこそすれ、決して解きほぐしては呉れなかつた。

尚、そんなことより、男にとつては、自らの性格がどうしても商人向きでないと覚えて以来仕事への興味が全く失われ初めたのがもつとも重要なことの様である。男はしば〳〵義務を考えた為、何に何の特技もない自分が、現在の職よりも良い仕事を思つけられる筈はなかつた。人に勧めるのも物憂かつたし、私妻等の人混みの中で職を求めることは何となく気が進まない。

その上、奇術商の店員と云う仕事は、やはり男にとつては誰れ難い魅力でもあつたのだ。何よりも其処では本か比較的自由に読める。十七の年から手解きに入り、二十才で復員して来てこの店に入つた時、男は自分が何も知らない人間であるのを知つた。文学も哲学も、其他いつさいの難かしい学問に全く言葉である自分を知つた。男は多分に性格的な奴みによつて、彼にとつてはかなり難解と思える本まで夢中になつて読む様になつた。

すると男は、自らの地位が、それらの輝くばかりの普遍的文章に比して、余りにも低いとるに足らないそれであると云う思いにとりつかれ出したのである。この一度とりつかれた性急な劣等感は、以後男の周囲を全て暗々とした陰りで包み始めたが、男はそれを嬉しいのけも術を知らなかつた。

一見生面目過ぎる位の勤めぶりであつたから、多少後輩はこの男の動静、しかし店主には一応の信用で迎えられてはいた。そして男は、自分が信用されていると云うことも、よく知つてもいた。奇術料は手取七千円で、一人暮しには決して不自由ではなかつた。最後の意味で男は、労基法と云うものを知つて以来、一日十一時間勤務、月一回公休と云う条件からすれば、それも決して強務の待遇とは思はない様になつたが、だからと云つて非常な不満があつた訳でもない。又今のまゝでも結構生き続けて行けることも充分承知している男だつた。

けれども、相変と云う汚い下宿屋の二階の四畳半に帰つた後、男は最近、自分ではどうにもならない得体の知れない焦りといらだちで苛つけないのを、日毎に知る様になつていた。男は酒を覚え、女の味を知つた。二十三であつた。

再び花火が上つた。荷馬車は横丁へ、れ、車輪の音に又男は一人になつた。朝もやも一段と濃くなつている。誠も雨が来るのかも知れない、生暖い天候は帰更のものではなかつた。

静かその生暖かさは、今の男にとつてはこよない有難いものであつた。良夜が濃れている。男は再び、氷夜の孔雀を思つた。

「おいもうよそういやないか」
男は、全係の寛二にそう言われた時、妙な友達を感じた。
「よす、ふん、いや勝手に帰れ」
寛二が黙った。それ〳〵の側に坐った女達が
「おい帰るなら帰ていいんだぞ」
「まあ〳〵」
寛二が機嫌はことを言って、女達に何かを頼むと更めて二本の酒が追加された。
男はどか、自分の財産がもう絶対、点に達していることを知っていた。吐気が時々つき上ってくる。無意味な浪費であった。今までにないことでもあった。
男は注がれた盃の中のものを半分以上こぼしたら、酔った頭の中で、ちらっとそのバカ〳〵しさを思った。自らをそう罵りたてるものゝ実体、自らの弱さを知れば　やはりバカ〳〵しいことに違いはないのだ。か、知ってもどうにもならない　――ということも又男は知っていた。
寛二の家で三合余、この店に来る前に三軒廻り、まだこの店に入ってからは銘々勝手に入ってからは銘々勝手に入ってからは銘々勝手

平衡を失つた感覚の中で、男の心は簡単に決つた。強引にかけ合うことだ。酔は男に限りない自信と自尊を強いわしたか、反面向う見ずな勇気を與えている。

そこから更に半町、会い通りの狭い四つ角にその女の家はあつた　一人は電柱の蔭に、一人は門口に、更に一人はかの男の跡をとつて店内に入ろうとしている。か、その三人とも男の求める女ではなかつた。男は構めずづか〳〵と店の中へ入つた。あたかもそうして怒い込んで入ることで、"あの女"を胡之繕ることが出来ると思い込んでいる様な強引さであつた。電燈の青の女と、門口の女が一寸男に近よりかけたが、男の酔眼合を見て、またつと元の位置に戻つた。求める女の姿はなかつた。

しかし、男の心も又動かない。男は黙つたまま、女達の心強作座に陣取ると、どっかりとあぐらをかいて坐つた。

「あらあ、お客さんてめんたなの、珍らしいわねえ」

前の客を送り出し、男の前に坐つた女は、ところんとした目で男を見据えると、辺りはばからぬ高声で言つた。

男は、その女のまだ少女じみた若々しい顔を、強め強く眼に焼えようと焦つている。浜野辺百合子、通称マリ十九才、蔵業遍者、アバズレ娘婦、男の頭に、今までのこの女についての知る限りの噂が甦える。事実彼女は、男の前にも、如何にも自慢そうに、ヒロポンの注射で蒼色に変色した腕の斑点を誇示する様な無知を、再度ならず示していた。

「ね、凄いでしよ、あたいの腕さ、もう一日三十本は必要なのよ」

何の恥じた、見ず知らずの自分に、云わずともかなのその様なことを誇らのに意味のあるのか、女が朝にもなくそれにひりさ〳〵とかつ放漫的とかいう文庫本を、気まぐれの様に渡りに来た時、彼に示した態度を思い返して、男は酔の渦の中で、女の虚言の在り方を攻めてまさ〳〵と思いになつた。

しかし男は、そのために、この女を意識に危険迄く思つたことに間違いはない。あろう文学少女敵味のデモるのと考うことに思かれたと云うこともあろう。若い青くさいセンチメンタリ

スムもあろう。か男は、女が表面明けっぴろげであるだけ、反面の女の淋しさを云うものを俺は直感的に感つたのだと自覚されてもいる。"あの女"と共感に思つたのも、以上の様な共味の境を出てはいない。

「自立、あんた、あたいを名指しで呼んで呉れたのだろう」

「あ、決つてらあ」

「だつたら、そんな所に御坐を抱いていないでわよりよ。あたいはね、あんたがあたいを名指しで呼んで呉れたのかとつても嬉しいの」

自ら乱酔して居たら、その乱酔の中で男が見極めた様に、女は明らかに今宵も薬とアルコールの力を借りている。

「あたいね、飲んじゃったのよ、だつてそうしないで居られなかつたんだもの」

四畳半の部屋、頃所しい洋装少女スと二重ねの和ダンス、姫鏡台、別に小箪笥の小ぢつぱりした夜具、男は眼をそれらの調度数の上にはせたら、女の言葉を聞いた。

「注射も打つたんだろう」

「えゝ」

「毎晩なのか」

「そうよ――悪い？」

「どうして？」

「だつて、あんた、今度この俺が君としかめたいやないの」

そうか、確かに、今更この俺が君としかめて仕体ないつた振つきをするのは大力しい。男は誰へともなくうすく笑つた。"いや、別に俺はどうとも考えちゃいない。君がヒロポンを中毒する注射たろと、アルコールの数力に負けようと、俺には差し当つて何の関係もないことなんだ。云つてみりや、死にぬけりや、死んだつてかまいやしねえ"聞いていて何と考えたのだろうか。一瞬女は、男の顔をまじ〳〵と見た。っ要するに世間の奴等が何んと云おうと、それは所詮、はたでワイ〳〵云うだけで、到にとれ程の公様を示してくれるものでもないだろう、彼らの中にあるものは、よりるく、好奇と侮蔑の目だ。

男は自分が、何を喋つているのか、はつきりとは判らずに、只いたずらに残酷的な思考感にひたつているのだ。しかも、男のその言葉をきく

マリの顔色は尋常ではない。恐らく滅らな流涙の時間が流れた。

「ねえ、どうしたのさ、急に黙って了つたよ」

マリはその沈黙に耐えかねた様に男の顔を覗ぞ込む。

「ねえ、横になろうよ」

しかし男は、放心したように虚空を見つめて動かない。――その特徴に、此要以上に欲んがアルコールの作用で、男は全く己れを失つていたのである。部屋の廻り、安物の調度数が廻り、青色い疲せた女の顔だけが廻つて――男は正体もなく眠つた。

やがて男は、ふと何に驚みた様の様さと、或く疲れ無い人声とに、ぼんやりと目覚めた。

「姉さん、三度もあかれたの」

「うん、不景気ね――とゆかど、もうそろそろあたいも年貢の納め時かな様よ」

「あら、そんなことはないわ」

「いゝや駄目々々。マリちゃんがそう云つてくれるのは正直嬉しいけど、ゆうあたいにはフリのお客が時々ひっかゝるわけよ、二度と直ねて私の所へ通つて来れる様なんて唯の一人もありやしない。わアさんの顔みるのも此の頃はつらいは」

「なに弱いこと云つてんの、どんな商売だつて弱気になっちゃお終いじゃないか」

「けど、本当にあたいはあたいの寿命を知つた気がするの。この商売はせいぜい三十前か歳迄持さね」

それ〳〵四畳半の模様し、マリとその今後とか話しているのだ。

「だからマリちゃん、どうか身体だけは大事にしてね、ポンも酒も程々にしないと、やがてあんたも泣く様になるわ」

「えゝ、判つてんの、でも判つてたつてどうにもならない。あたいは、どつても自面じゃこんな商売は一時だつてつとまらないんだ」

「判るわ、そりゃ判るわ、嫌い程マリちゃんの気持はあたいにも判るのよ。だからと云つて若いのに任せて無茶すりゃ早晩行きつまるのは目に見えてんだから、ポンだけは止めて」

「有難う、姉ちゃん、今時、私のことを親身になつて心配してくれるのは姉さんくらいのもんだもの、あたいだつて自分の代りを加減は、よしく判るのよ、けど／／」

蒲団の中で、ふと話声がとぎれ、声を殺した嗚咽が男の胸近くに聞えた。女は、自らの言葉に依つて引出された自分の位置のみじめさに感じ入り、それが女の本当の素地である十九の乙女の感傷を丸出しにして、激しく泣きじゃくっている。

「けどあたいには、あたいには、親さえも何の頼りにもなりはしないんだ」

「それは何あるんだけじゃないいやないの」

「だって、あんな親、歌よりもまだひどい」

「相変らず、あとこに居るの」

「うん、死ぬことも出来ず、そ奴にもなれて働いで稼らかの金を送ってやらないことには、親子五人干ぼしにはあるんだ」

「少し打っちゃって置いちゃどうなの、そうすりゃ、一寸は考えるでしょうよ」

「それが考えて呉れる様な親なら、あたいだつて、これで苦労のしかいもあるんだが。」

「それね、そうね」

再び話がとぎれ、こんどは女の激しくやきこむ声が代つた。その後で急に目覚めたかの如く、男は、「おい、どうした」

蒲団の中ので瞳を開いた。

「あら、お目覚めになっちゃったの、ごめんなさい。うゝん、なんでもないのよ。持病かい寸癪を出したの」

「持病？」

「ええ」

「ふん、癪でも起いのか」

「かも知れないわ」

「さつきの話ね」

「えっ？」

「いや、実は君は最近の話を聞いていたんだか、君のその親父さんてのは何処に居るんだ」

「S川の土堤よ、何故？」

「いや、なんでもない」

だが、男の頭の中には、マリが少しの居ひれるとこうもなくS川の土堤際よと云つた時一二度行つたことのある場所の風景か、瞳の中でのな

り紙明に浮かび上って来るのだった。大きな長いコンクリートの橋があり、新しい高い堤防と平行して、同い堤防が覆き尽くされ、後に写真館が並んでいる一部に、沢山の掘立小屋がある。マリの家族は、その掘立小屋の中のどれかに住んでいるのだろうか。確かにあの一部の、人間の住むべき住居の結構ではなかった。その一部の住人と云うだけで、部に人間の仲間に数えられることはない。マリの言葉を借りれば、彼女の親や兄弟は、服の襟にその中で生きている――と云う。

「君は時々其処へ帰るのか」

「えゝ、あたいがお金を持ってかないと、ここ迄でほう〳〵の姿でとりに来るんだもの、やりきれやしない、表られて皆の前でいゝ顔をかくより、あたいの方から持って行ってやった方が気が楽さ」

「ふん、そんなものかな。」

「あら、なぜ」

「そんな親達は、やはり思いに見捨てたらいゝ」

「それが、あたいには出来ないから、苦労してるんじゃないか」

「つまりその苦しさを麻薬やアルコールで麻痺させてるって訳だね」

「ふん、だからどうなってのさ」「いやー別に」

すると男は、急に言葉につまった自分一人さへ律することのおぼつかぬ己れが今更この女の堕落をとやかく批評たてしてみたところで何になるだろう。

所詮、人は自らの力で生きて行くしか道はない。どん底に落ちても生き抜くことが正しいのか、それとも、どん底への過程の中で、今の己れの様に死を思うことか――男は自分がこの女に比して遥かな生き方しか生きてはいないのだと思うと、急にひき入れられる様な淋しさが襲って来るのを覚えた。弱い男！淋しい男――しかしそれは所詮、青白いひ弱い感傷でしかあるまい。今までに読んだ限りの書物の中でこの書物の中の結末的な美い礼句に触っていると云へなくとない己れの中の青白い部分とは一体何なのか。――しかも神秘的な文学の世界の中に沈めることに依って、己れの行為や罪過迄で美化し自己満足しようとしている己れ。

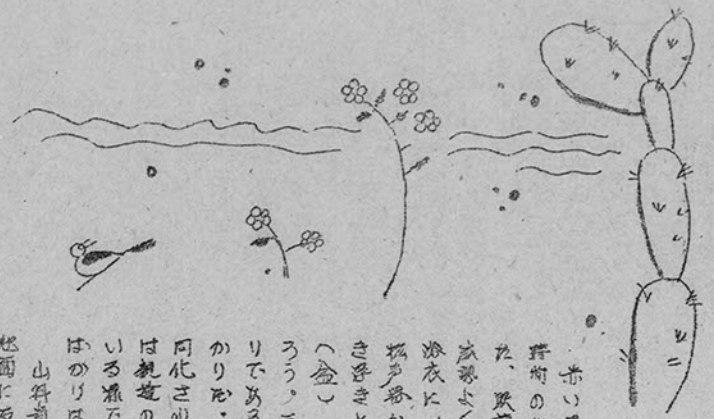
暗さの中で男は、急につきあつてくる、鳴る鶏いちのを覚いた。

（一九五五、一一、三。未完）

遠い太鼓

立花恵子

姉妹



赤い提灯をゆるがせし、太鼓が辺りにひびいている。東京から此に約五時間の地にあるこの小都会にも、おそまき乍ら夏祭らしい気分が高まって来た。駅前広場に組んだ櫓の上には、この日を楽しみにしていた若い衆達が浴衣に、手拭で頬かぶりした青年達か、青春を謳歌する歌に踊っていた。拡声器から流れ出す、土地の城さん達の金踊り歌も、何かしら、辺りに浮き浮きとした雰囲気をかもし出していた。

（金）　この三日間位、若い人達はどんなに楽しみに待ち望んでいた事だろう。三日間の金もあっけなく過ぎ去ってしまい、今宵はその最後の金踊りであるだけに、近郊の村々からの臨時列車も出て、花踊は一ぱいの人だかりで、廻りを囲っている人々も、いつのまにか辺りに流れる空気に同化されて、今にも浮かれ出しそうだった。若い人には若い人の、親達には親達の、そして、老人達は老人達ですぎ去った青春時代をなつかしんでいる様である。いつもは駅前を美しく飾るトリ〳〵の木オンも、この夜ばかりは、暗から四方に張られた沢山の提灯に圧倒されていた。

山科貞子は、この太鼓の音が好きだった。若者達から流れる太鼓の音は地面に反射して、ドスン〳〵と快い響を伝えている。再開した中にも、フ

ト飛出したこのリズムに、彼女は思いかけなく惹しかつた。

貴子がこの地に来てから、もう四年になる。今までに度々、金を追えたか、余り郷土のそうした行事に関心をもつていなかつた彼女は、皆がソゝロ歩きしている時も、いつも顔からキラつて、家に閉ぢこもつてばかりいたものだつた。今晩、若い人達の合合の帰り、何げなく歌前に立ち寄つてみたのだつたが、そこで思いかけなくも、今まで全然知らなかつた郷土の美を発見し得たのだ。

「なぜ、こんなすばらしい行事に気づかなかつたのだろう。

彼女は、皆の後から中央の踊りの輪をみつめていた。まだ始つたばかりとみえて踊り手は少かつたが、こうしている間にも、段々と輪が大きくなつて行くのだつた。そこには性別を超越し、世の中の辛さを忘れきつて、たゞ踊りの世界にのみ心を打込んだ人々の姿がみられるのだ。

「私も、世の中のすべてを忘れきつて、一つのものに熱中してみたい。

世の思惑などを気にせずに、物事に没頭できる人々がうらやましかつた。

彼女が浴衣など着込んで覗く気持になつたのは一体、何年ぶりだろう。こゝ五六年の間、めつたに着物などを着た事がない。だから、今夜、袋を出て来る時、大さわぎしたのだつた。いつも三尺ばかりなので帯をしめる事が出来ず、母と、そして病弱の姉から帰つて来たばかりの姉とを動員して、やつと出かけるまでにこぎつけたのだ。平素は窮く程、動作が活潑なのだが、こうして和服を着てみると、みかけだけは一人前に淑やかに見えるのだ。彼女にはくすぐつたかつたが、それでも悪い気はしなかつた。五尺四寸、女としては、すこぶる長身で、その上、やせ形だつたので、和服姿は大ラリとして、夜目にも好いその横顔は、時どすると、振りつくしまもない冷たい表情を現わすそうで、自覚は少しも思いなかつたが、よく学校時代から友達に云われていた事だつた。それが、今、郷里に帰つて来て勧めに出る様になつてから、「貴的な彼女さん」と一部から云われる蔭口の原因ともなつているらしい。併し、その「彼女」と呼ばれる彼女の態度が過去の生活環境から滲み出るものので、いくら努力しても、そうたやすくは直す事

が出来ないものだ、と云う事を人々は、中々理解し得なかつた。それに比べると、弟の純子は人つき合いがうまい、すべてが積極的で個性の強い娘に反し、純子は典型的な日本女性タイプだつた。女医と云う職業には、どう考えてもふさわしくない程、淑かな純子が、いざ志望に接すると、どうして冷厳な科学者と変り得るのか。姉がすべての人達に愛想よくふるまつているのを、彼女は何とも云われぬ妙な気持で眺めていた。

「私にもないあの世渡を云う位なら、いつその事始めから云わない方がよい。

彼女は長兄をあざわらきたくはなかつた。「それは、貴方せんかまわないからよ。大人になつたらきつと分る時が来るわ」

いつか姉がやさしくほゝえんで云つた事がある。併し、彼女は将前の深淵さから、自分の長所に動じる程な事はしたくないのだ。

東に海を控え、附近に大きな炭坑地帯をもつこの M市は、郷里とはほんの名ばかりで、東京生れの彼女にとつては、全く縁のない土地である。この地に友を持たない彼女は、御つて、自分の育つた東京になつかしさを感じているのだ、この様に時代の急変がなかつたら、彼女の家は、まだ郷里に引揚げては来なかつたろう。そして、一部の人達に蔭口をきかせなかつたろう。だが、こうした時代の移り変りで、斜陽族の仲間に入つた今、僅かな土地をもつこの郷里に引き揚げて来るのが、当然歩むべき道だつたのである。それにしても、この頃の彼女は、人間の本質とと云うものがつくゞ〳〵分つて来たのだ。人間と云うものが、どれだけ現実的なものか、花の盛りに集つて来る沢山の蜂の様に、経済の道を歩んでいる時代には、何かと因縁を作り上げて彼女の家に出入りしていた人達が、一度、敗戦と云う大きな打撃で地位も名誉もすつかり失つた今、殆んど寄りつきもしないではないか、否、それよりも、何か、引つかゝりがあるのを恐れる様なそぶりさへみせるのだ。あまつさへ、導火がつた態度を取つたり、色々と悪口を云つているのを、彼女は知つている。今では道であつてもそ知らぬ顔で見下す様な態度をとるかつての出入りの人々を、彼女は軽蔑

していた。どんなに逆境にあろうと、彼女は自分の血の流れを誇らしく思っていた。

〝世の中が、どんなに変り変ろうと、私は自分の生命を誇りを持っている〟

その気位の高さが、よく嘲に落口を云われる原因ともなるのだが、それ程迄に大して気にとめてもいなかった。それなる事は大して気にとめてもいなかった。また、この土地に来て日が浅いので、そんなに気がつかなかったが、終戦後、すぐこちらへ来た両親達への世間の風当りは激しかった。戦争中は、郷里に帰を飾るものとして賞にさわぎ立てられ、多忙中をやっと帰郷しても、講演会などへ引っぱり出されて、ゆっくり休むひまもない程だったのが、一度世の中がガラリと変ると、さも戦争の直接責任者であるかの様に考え、すべてを押しつけて侮蔑視する、悪気な母が、いつか思わずくやし涙をこぼしたのをみて、彼女の胸の中にジーンとこみ上げて来るものがあった。大家に育ち、今迄、取上げて辛い事もなかった母には、終戦後、今日迄の過ぎ、どんなに困難な山や谷であったろう。めつきり平取った母をみて、彼女は心から母を慰めるのだ。

――私には、とてもあんな嘘似は出来ない――そのくせ、すぐ口返答をするきかない娘であった。

〝これが本当の世の中だと思ってはいけないよ〟

いつか、母がしみ〴〵と云いきかせた事がある。なるほど、これが世の中の本当の姿とは云えない。併し、一度、人間の心の弱さにおれてしまった今、そのまゝ、母の言葉を信じきっている訳にはいかないのだ。彼女が学校で教えられ、又、心の中に描いて来ていた世間の人達とは、余りにかけ離れているのに、何かしら、段々、自分と云う人間が社会の流れに、ついていけなくなるのに気がついていた。

自分の心が苦しい時、よく彼女の頭の中には美しい母校の先生で来る。あのクリーム色の壁、赤い屋根、すべてがロマンチックな教会に、チャペルの鐘が高くなりひゞく校生で、どんなに楽しい生活を送ったか。世の中の苦しさを全く知らなかったあの頃――。すべてが美しい夢の様なフンイキに包まれた学び舎にいる頃に、世の思惑を気に

しつつ送る毎日の生活か、この世にあるなにとは夢想だにしなかった事か、すぎ去った学生時代か、彼女には今更ながら、なつかしく思い出される。それは、二度と再び返らぬ楽しい思い出だけに、切ない程に慕わしく、彼女の胸に迫って来るのだ。こんな感傷にひたっている時、彼女は ハッと我に返る。

〝今は、こんな甘い感傷にひたっている場合ではない〟〝お稽古〟としてすゞしした時代は、どうの昔に過ぎ去っているのだ。働く婦人として、世の中にとびこんで行かなければならない現実ではないか〟

この決心をする迄に、彼女はどんなに苦労した事だろう。始めて勤めに出るときまった時、嬉しさはしに溢れる涙を、彼女はやっとの事でこらえた。それは有頂〟絶入り娘〟だった自分が勤労者として、世の荒波にふみ出す運命を目の前にして、今迄の生活に終止符を打たねばならないかを悲しむ一抹の感傷だったか、それ程、彼女にとって社会生活にふみ出すのは、大きな出来事だったのだ。いざ就職してみると、世の中は、中々、彼女が想像しているものとは違っていた。しば〳〵ある対人関係のイザコザに、何度彼女はやめようと思ったろう。命し、仕分の職の経済状態を考えると、苦をくいしばって、我慢しなくてはならなかった。それを今日迄我慢しつづけて来たのは、全く、彼女の負けずぎらい、内意地の強さと云わなくてはならない。

物心のついてからと云うもの、彼女は余り異性と接する機会をもたなかった。元々が内気で自分は流行に出まている彼女は、学生時代、異性を考えるのは罪悪だ。と思い込んでいたし、道を歩くアベックにも、思わず顔をそむける程、潔癖だった。それが社会に出て、同じ職場に働かねばならなくなった時、彼女は何かしら、形のない恐怖におのゝいていた。同僚と共に町を歩いていても、人並に異性とつき合っている自分が段々、堕落して行く様で、第三者としての自分に反感をつかして、思に胸を突き放してやりたい様な衝動に駆られる事も度々だった。そんな彼女が、社会に出て二年以上になった今、異性と平気でつきあえる様になったのか、自分でも不思議でならない。あの始

めて勤めに出た頃の気持に返りたいと思っても、この頃の彼女には、とてもなれそうもなかつた。あの頃の自分は、本当に、お嬢様だつた。併し、二年以上たつた今は、あの頃のあろさこそないが、何ものにも負けまいとする意志だけは、より一そう強まつた様な気がするのだ。そして、その気位の高さも……！。

第　章　二

「まア、先生様。この暑い所をよく」

夕食をそこ〳〵に、急患の迎えを気軽く応じた純子に、渋をこぼさんばかり言んでいた家族の声が、いつまでたつても彼女の耳にこびりついて離れなかつた。

「貧困家族」

病院に勤める様になつてから方々へ往診に出かけたが、こんなひどい家は始めてだつた。市好美化計画で、大部分立ちのきを命ぜられた場立小屋も、ここ市街のはづれになると相変らず強つていた。立てはすぐ頑かつかえそうな低い天井。そして、たゞ切り取つただけの窓には、もう黄色くなつた新聞紙か、折からの風にバタバタとかすかな音をたてていた。夫を戦場で失つてからは、十七を頭に四人の子供と、中風で身体のきかない年寄りを抱え、市の救護者等の日雇で僅かに糊口をしのいでいる、と云うこの家の主婦の苦労にやつれ顔。

「こゝにも戦争のやセイ者がいたのだ。

彼女はつく〳〵感じずにはいられない。戦争がすんでは早十年。戦災をこうむつたこのM市でさへすつかり復興し、以前にまして発展しているのに、こうした戦死者の家族達に強い政の手がさしのべられないのは、どうした訳であろう。

「何か為に出来る事があれば、たとえ微力でも力になつてあげたい」

だから今夜も、途中まで送つて来た主婦を無理に断つて、往診料も取らずに帰つて来たのだつた。たとえ、それが正当に貰うべき往診のあるものでも、困つている人から金を取るとゝう事は、彼女には出来なかつた。貧困家庭の患者は別として、生活に困る所謂「貧困家庭」からは、彼女は一銭も貰つた事がない。

「医者は天職である。病いのために苦しんでいる人を、少しでも早く病魔の手から救い出すために全力を傾けるのが、医者の使命ではないだろうか。それが彼女の信念であつた。

「山科先生、それは余りに慈善的じゃありませんか。どうも僕らには解しかねるナ。失礼だが、やはり女の甘い感傷ではないですかネ」

よく同僚達からそんな事を云つた。なる程、往診料かそのまゝ自分の収入となるこの病院では、皆は高給に収入を処分しているのであろうが、併し、彼女は、いくら家の経済を助けていても、この信念だけは、絶対にゆるがす女にしたくなかつた。貧しい人の血と汗にいんた金を手にする事は、彼女にはどうしても出来ないのだ。

急苦しくなる程、むし暑かつた一日も、日が落ちるに伴い、秋分級和されて、折からの微風が快い。

「今日も、又、貧しい人のために少しでもつくしてあげる事が出来た」

何かしら満ちたりた彼女の耳に、遠く大勢の音が流れて来た。

「そうだ。今日は駅前広場で踊りのある日だった」

人の流れに誘われた様に、彼女は駅前へと向つた。金踊りをみるのは何年ぶりだろう。別に興味も湧かなかつたが、後期の人々と接する以上、やはり、皆の気持に親しみをもち、その生活まで深く入つてゆきたかつたので、彼女は努めて、郷土の行事に親しむ事にしていたのだ。

もう大分、廻りの人垣が厚くなつていたが、比較的背の高い彼女は、皆の後からやつと中央の踊りの輪をみる事が出来た。櫓の下の人々も大分ふえて、さぞ賑しゆに踊つている。

「健全な踊」

彼女はフッと、妹がいつか駅場のスクエアダンスを輪状そうに踊つていたのを思い出した。男女には何の不純も感じられない。むしろ、健康的な若々しさがあつた。

「貴子」

妹の事を考える時、彼女はあかんな気持で一杯になる。

「然　就」

あれは妹がまだ女学校二年の夏だつた。五っ違いの自分でさへ、あんな大きなショックを受けたのだ

から、丁度冷しやすい年頃になった妹は、どんなに心を傷つけられたろう。然程になるまでは、彼女の家も中流以上の家庭だったので別に取り上げて考ふまでと云うものはなかったが、いざ、世の中が急転して、長い間かゝつて築き上げた地位がすっかりなくなってしまうと、普通以上に学費のかかる医者の学校に子供を通わせる、と云う事は相当に困難な事であった。併し、両親達は、多大のやせイを払ってまで、彼女を一人前の女医に仕上げてくれた。

特に、大学で好きな文学の勉強をしたい、とかぬ〳〵云っていた妹も、そのやせイの一人だった。「いゝのよ、私、何とも思ってないわ、文学の勉強なんて、その気になりさえすれば、学校へ行かなくなって出来るんですもの」

彼女の苦しい心を察してよ、何けない明るい顔付でそう云ってくれるのだったが、却って彼女は、心から妹を可哀想だと思うのだ。自分のためにやせイとなった妹を幸福にしてやりたい。自分の欲する事の出来なかった青春を楽しく送らしてやりたい。それが せめてもの妹に対する償いである。

余りにもあっけなく過ぎ去ってしまうた自分の青春をかえりみて、彼女は、妹にだけは、自分の二の轍をふませたくなかった。

「山科先生、あなたもいらしてたんですか」

ハッと我に返ってふり向くと、同僚の村井だった。「まア、村井先生！」

自地の街は、いつも病院でみなされている通診板とは違って、何か、また寄生らしさが板ぎらいな感じを与える。

「久しぶりですね。こんなにゆっくり出来るのは……」

彼は、頬にたれる前髪をかき上げた。

「私、今、往診に行った帰りなんですのよ。こっちで通りかゝる事を思い出したものですから」

「往診ですか、ご苦労様、併し、先生はよくやりますナ。この間も、院長と部長がほめてましたよ」

「まア、私など、そんなお言葉に償するだけの人間ではありませんわ。たゞ、自分のすゝんでとつくしているだけですのよ」

彼女は、うす赤くなった顔をそむけた。

「先生は困っている人達の面倒をよくみてやるでせう。この間も、僕の所へ来た患者が、とても先生をほめてましたよ。彼等の間では、あっぱら先生の噂で持ち切りらしいですわ」

「そうですの？　困りますわネ、余り必要以上にさわぎ立てられるのは……でも、私、病院にみえる患者さんでも、立派な身なりをしていらっしゃる方よりも、むしろ、市井のおかみさん達の方が親しやすい様な気がするのですよ。そして、そう云う方達の方が、人間的にも、情愛があってすぐれている、そんな感いを受けるんですの」

「彼等は自分の本質を云うものを、かくそうとしないだけに、純情な所もありますね。併し、僕は、正直な話、慈善病院の院長にはなりたくないですね」

「そうですか、私、自分の腕に自信がついたら、段々に小さな病院を経営したい、と思いますのよ。何も、規模の大きなものでなくてもよいのです。たゞ、自分の念願を、少しでも実現したいと思ってますの。私、その病院の事業の一部に施療部を作って、貧しい人達の病気を直してあげたい。そんな計画を持ってますのよ。こんな事、今迄、どなたにもお話した事はありませんでしたけど、とうとう話してしまいましたわ。先生には、バカバカしいお話でしようけど、でも私、少しでも実現したいと思ってますの」

半来はあとなしい娘子だったが、この言葉には強いるばかりの情熱が感じられて、村井は今迄知らなかった彼女の反面の一部をのぞいた気持だった。

「慈善事業ですね、きっと出来ますよ、山科先生になら、崇花学園の園長だって、立派にやっていけるじゃないですか」

「藤本先生ですの？　あの方は、本当によくおやりですわ。私の女学校時代の先輩ですので、度々、お邪魔に上りますけど、敬今と感化院の両方でございましょう。よく、おやりになる、と、いつも感心しております。私も、あの十分の一でもよいから、実現したい、と思いますわ。妹は、とても藤本先生を

尊敬してますのよ」

「あゝ、先生には、妹さんがありだつたんですね」

「はア、妹と二人きりですのよ、市役所に勤めてるんですけど、まだほんの子供で、きかん坊なものですから困りますわ」

「若い人は活潑な方が、殺らつとして良いですナ、今の様に、時、の移り変りが激しい時代には、少しきかなすぎる位でないと、とても世の中についてゆけませんよ」

「そうでしょうか、でも妹って可愛いですわネ、私、自分の果せなかつた夢は、皆、妹によつて実現させてやりたいと思いますわ、私の時は、戦争中でしたので徴兵延期されましたから、せめて妹にだけは、青春時代をノビノビと、幸福に送らしてやりたい、と思つてありますよ」

「所し、先生の様な御姉さんのある方はうらやましいですね、僕は、男ばかり三人の末つ子ですよ、小さい時、どんなに姉をほしかつたか分りません」

村井は、踊りの輪へ再び視線を移した。

「本当に久しぶりだなア、高校時代、夏休みに帰郷して、あの踊りの仲間に入つた事がありましたが、戦争中だつたので、こんなに踊りも盛大にはなる事はなかつたけど、あの太い輪郭の下駄でよくも器用に踊つたものです、あの当時の、高校生、と云えば、バーバリズムの代表的なものでした筈、我々は、却つてそれに労りを感じていたのですね、先生は、どうお思いでしたか？」

「私、余り勝者な方は好きではありませんけれどやはり若い方は元気で、健康的であつてほしいと思いますわ、その点で、今の高校生達からは、一級に教育な印象をうけます、私は、やはり一分のすきもない完成された人間よりも、どこか未完成な二オイの多分にある方に心をひかれますね、でも意外でしたわ、先生にもそんな時代がおありだ、なんて」

お竹は苦笑した。

「先生もお入りになりましたら？、皆、楽しそうに踊つていらつしやいますわ」

つゞく　（未完）

マント

荒原善蔵

第一部

お嬢は砂岡の四ツの時に死んだ。

それから三年後に爺やが死んだ。爺やつまりお嬢の父親の死は、砂岡、の部落にも残つていた。

死ぬ前の爺やは、砂岡の兄へへ当時、兄は田中学三年生であつた）

「左右――お前に爺やが村長になつた時、つくつたマントと、大島のおついをやるぞ、だから爺やの命日には、マントを着てお墓詣りをしてくれ」兄は涙をかくして、うなづいていた。

爺やの命日は、霜の降りかかろうとする十一月の二日である。

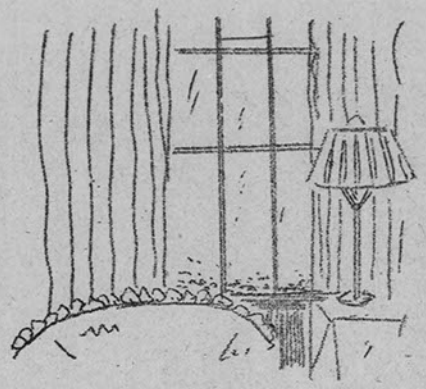
砂岡は爺やの最初の命日に、マントをはおり長兄に連れられ、しばらくバスに揺られながら、墓地のある半農半漁の村へ着いた。

墓地までかなり、距離があるので、兄は人力車を頼んだ、黒い眼の中へ、兄が先に乗り、砂岡は兄のマントに、包み抱かれ、まのろく走る人力車の中で、

「沢御――あそこに橋が見えるだろう」

と、兄は指をさした。砂岡は兄の指さした方へ眼差を追つて行くと、新しい欄干のついた橋が見えた。兄は砂岡に確しかめさせ、

「爺やはあの橋を造ろうとしたのだ。それは村の人が詩町の市場へ、野



家を建ぶのに、一里も遠廻りするからだ、だから村があまり貧乏なので、恐ろしいことが出来なかつた」
兄は人力車から、通り　つて行く風景を見つめながら云つた。
「そして、爺やの次の村長、つまり今の村長が造つたのだ、爺やの時代の為を造る　のお金はあつたのか、その金は村の全財産なのだ、で橋を造ると村がますます貧乏になつてしまうのだ。――もし次郎が村長だつたら、どうする」
砂岡は、道添いに並ぶ農家の家の間から、眺かれる海や、或は家々が途切れると、視線を方々へ、左側に続の刈り取られた田圃、、右側には砂地を通しての広々とした海原、このような風景へ、砂岡は視線を追い、兄の話しを凝然と聞いていた。兄は砂岡の顔を見つめながら、返答を待つた。だけど砂岡はすぐに返答は出来なかつた。それで兄が、
「次郎、丁度村長の爺やは、こうゆうもんだ。
かうさんとどううさんに、片手づつ握られ、両方から、こうちだ、こうちだとひつぱられているのだ。この時の爺やはどううへ行つたらいいだろう」
「どうちにも行きたい」
と、砂岡は特にしんみりした口調で云つた。そして泣きまねている、マントからの　いか、なせか車まろつた。
「どうにも行きたいだろう、爺やもどうちにも行きたいのだ、だかどうちか一人を撰ぶのだ（既けている兄の話しをした。　を殺して凝然と聞いていると、砂岡は眉をかきしめ、包まれいる黒いマントの上へ、水晶のような涙を流かした）
「どうちか一人を撰ぶ爺やは苦しいかつたろう」
兄はマントの上を、白い小さな水玉がスーと流かれているので、砂岡の顔を見、
「次郎泣いているのか――」
砂岡はお爺の顔が知らぬか、死んだお爺を思い出して泣いた。砂岡は涙でうるんだ目を、兄の顔へ据え「兄ちやんは、どうちを撰ぶ」
砂岡は、兄を詰問した。
「兄ちやんだつたら・――　兄ちやんも、どうちにも行きたい」
と、砂岡の体を前より、強く兄は抱いた。

まのろい人力車は、いつも墓地を目の前にしていた。
る寺の爺やの命日に、兄はマントをはぎると陽りの黒い顔へ、憂鬱そうな表情を浮べていた。兄と砂岡は、墓地へ向かう途中、バス停留所の掛茶屋の中で、「オー」と、驚きのめる声に、兄は視線を後へ素早く向けた。砂岡は前からくる兄の友達、横井を知つていた。何故かといえば、よく家へ遊びにくるからだ。横井は視線で挨をさかしている兄へ、
「マントを着て何処へ行くんだ――」
視線を後から、素早くなつてきた兄はさつい顔で、「祖父のお墓参りだ――」と、ぼすぼり云つた。
「砂岡、感覚が鈍かつているな」
「感覚も、感覚も、なにもかにも鈍つている。ただ本能のままに友達さえ忘れているだけだ」
と、投気かつているような口調で云つた。兄の言葉に、横井は急に　な表情をあらわし、
「ニヒつているな――」
と、云い終るか終らない時、墓地のある村へ行くバスがきたので、兄は言葉のかわりに、顔をしかめながら、砂岡と一緒にバスへ乗つた。
揺られているバスの中でも、始終、きつい顔で黙せたまま窓外へ廻廻する風景を凝然と見つめていた。砂岡は兄の友達、横井の云つた「ニヒつているな」　と云つた言葉に、
「兄ちやん、ニヒつてどうゆうわけ」
と砂岡は、あつたりの客に気を使かつて、兄へ聞いた。兄はゆつくり、視線を砂岡の顔へ向けた。
「なんにもなくなつた者へ、であるの」
砂岡は納得いかないので聞いた。
「次郎も兄ちやんぢになると解かるよ」
兄は泣いうけのない声で云つた。
ここで始めて、砂岡はニヒという言葉を知つた。
バスは窓外へいろいろな風景を、通過させながら、村へ着いた。
二人は去年と同じく、蒸気くさい人力車の中へ乗り、兄、砂岡を抱き、亡きお爺との思い出を、断片的に話すのを、砂岡は聞いていた。
まのろく走る人力車から、松林に囲まれた、墓地が見え始めていた。

そしていつか、憧憬の前へきていた。故郷に田植え、海浜を目前にした、祭やとお盆とのお盆にお帰りした帰へり、砂岡と兄は浪打際を歩きながら、

「次郎大きくなったら、どういう人になりたい」と、海原を眺めやりながらきった。

「ジエンナーのような人になりたい」

砂岡は小さいなかからも、学校での先生に聞いた、ジエンナーが印象に残っているのできった。兄は海から視線をはずし、

「ジエンナーは偉い人だ」

海原からおしよせてくる初冬の風に、兄のマントのすそは、こきかく揺されていた。

いつか初冬の空は、どんよりした雲がおおい始める頃になっていた。

その頃から兄は、蒼白い部屋で机に向い、急速へ没頭しはじめた、その姿を、砂岡は感慨深く見つめていた。

よく遊びにきた兄の学友、提井や友達も家へ遊びにこなくなっていた。

或る日、砂岡は夜更けた便所へ起ると、兄は隣から、マントをかぶり 独をしていた。

砂岡はこの時、兄に強力を感じた、「そして兄が日に見えない、何にものかと斗かつてるようにも感じた」

寒風〳〵とした晩、提井と学友二人、兄の対へ遊びにきた。それで四人で、火鉢を囲みながら、ぼつぼつと話しを、かんだかい声で話し合っていた。うつうつと帰りに入ろうとした砂岡は、かんない声で、目が覚め、話し合っている兄と学友の方へ視線を向けた。眠れぬままに話しを聞いていると、「人生」という言葉を何度となく聞いた、それで砂岡は、皆なの方へ視線を捕えた。

兄は提井へ、怒っているような表情で喋べつている。提井、学友達は兄の話に、考へこんだ表情で聞いていた。突然提井が兄へ向かって、

「誰れもが青春を謳歌するものはあるはずだ、それによって、人生を切り開いて行くんじゃないか——」

興奮した顔で、兄へ激しい口調で云った。

「人生を切り開らいた所で——人生なんか虚渡けの世界じゃないか」

兄は提井の言葉へ反駁をした。皆なは急に黙りこみ、きつい表情を見せていた。一時寒気くさい部屋は、シン——としたなかに、視線をはづし、急外へ向けると、闇の中へ初雪が静かに降っていた。

「ニヒっているな——」

と、学友が兄へ視線を移へ、鋭い口調で云った。砂岡は「ニヒ」という言葉で素早く兄の方へ視線を向けた。同時に墓地へ向かう途中、街路の中で聞いた「ニヒ」という言葉と、その時の兄のあつかしい顔がありありと想いだした。

砂岡は小さいなかからも、兄が「ニヒ」と云った学友へ、素バ抜いてやろうという感情が強いた、どうして兄が、なにもない事を考へているのだ？、夜遅くまで勉強をやっている兄が、なにもない事を考へているとは変だ？、

砂岡はなんとなく「ニヒ」という言葉が、憎くらしいものとして感じた。そして砂岡は、兄、提井、学友達の激しい口調で、喋べり続けるのを、神経で緊張と聞き、見つめていた。

寒さが深まるにつれて、兄は机に凝然と向かい、熱を続けるようになった。時折り、苦ひた地獄絵を、くるくる廻し、なにやら考えていることがあった。兄はいつともなく、興奮な表情を見せ始めていた。そして朝晩の食事の場所では、微台を割れるまで、一ト言も喋べらなくなっていた。

冬枯しの吹きまくる、凍る寒い晩、兄は早く家へ着いた。時、兄は半漁半農の村へ里子になっていた頃の話しをしてくれた。

「兄ちゃんは次郎へ（小学二年）より大きいかった頃、雪のほさほさ降る中を、真の紅をつけ、あたり一面真白な雪におおわれている、田舎のあぜ道を通りながら、泣きだしたいような寒さをこらへ、爺やのいる農場へよくお使に行ったものだ、兄ちゃんは農場へ入り、爺やの顔を見ると、今までの泣きだしたいような寒さに、爺やの懐へぶつかり、すかり泣いたものだ。その頃の兄ちゃんて、泣きみせたった、それで爺は、火の燃めら暖房から、お話したしてくれるのだ」

砂岡は暖炉にうつくまって、兄の話しへ、全神経を向け、熱心と聞いている、かの時前、あたりの景

並を逐うつてくる、木枯が激しく窓ガラスを、うつのに、兄の声が、極められたりしていた。兄は静かな口調で、話しを続ける。

「爺やのおは、雪に思い出でのある厚い人々の話だ。――思い雪の中を、お母さんの為に、あかぎれの素を持つて行く、中江藤樹の話や、やはり雪の中を、一列でも早くお母さんへ、薬をもつて行く、途中、大名行列にぶつかつた渡辺崋山や、或は寒さに耐える為、雪の降りしきる、井戸端で水をかぶる新井白石をいつた、偉い人々の話しをしてくれるのだ。それで兄ちやんは、爺やによつて勇気つけられてきたのだナ」

兄は熱に話しをきつたので砂岡は兄の顔を見、そして兄の向けている視線を追い、視野をあちこち窓外にぶつかつた。

雪一片もない空へ、力ミソリのような、三日月が冴えていた。木枯しはこりしようもなく、吹きまくつている。

兄は窓外から視線をはづし、すすけている裏故へ向けながら、ししかれた声で話しを続けた。

「次郎、お前はジエンナーが好きだつたな、兄ちやんは、爺やがお話ししてた中江藤樹が好きだつた。そして中江藤樹という人は幼年からの反対を押しきつて貧しい人々の子供へ、勉強を教えて行つた人だ。やがて近江の国の聖人と云われた人だ」

砂岡はこのような、兄の話しから、兄の小さい頃を想像しながら、眠りへ入つた。

それから、二三月吹きやむことを知らなかつた木枯しは、いつしか静まり、空には紫色の雲がおおつていた。そしてあたりは湿気かびた匂いに包まれていた。

陰気くさい部屋は、重たるい空気がたゆつている。そして寒むさのきびしいのか、身に沁みる夜でもあるだけに、部屋あたりはシンとしていた。

兄はマントを洩潔く、頭へかぶつたまま、机は向かい、砂岡にはわけのわからぬ、英語の話句を口ずさんでいた。それを砂岡は寝床の中で聞いていた。

さしあたるような寒い晩、兄の勉強を最後と帰床で見ていると、インキ壺に入れるはづのペンが、机の上をつついているのだ。それが二三度位、机を

つついてから、始めてインキ壺に、ペンをさこむのだ、成るマントで顔を包み、机へ凝然と坐伏せている事があつた。そして坐伏せたまま、静かに頭を左右へ、ひひにぶつかつた本か、机から離れたたき落ちた。のにもかまはづ凝然としているのだ。そして此の頃の兄は、朝晩の食事、特に夕飯の時の兄の顔には ひきひきとした、たてじわをつくつていた。

姉母は、無言で食べている兄へ何かつて、

「春太郎、お前は此の頃なにを考へているの。それとも体でも悪いの――」

と聞いた。兄は返事もせずに、食べている。安向いにいる父は、兄の顔をまじまじ見つめながら、

「春太郎、あまり受験勉強に、こだわらないで 近し遊ぶことを覚えろ――」

夜更けまで、机に坐り、勉強する兄の事を思つて云つた。

「勉強もよいけど、体に無理しない程度にやつておくれ――」

と、姉母は砂岡の御飯のおかわりを、よそりながら云つた。それでも兄は黙まつていた。この時の兄は、誰れかなんとかをうと、焼石に水のようだ。そして四人で囲んでいる飯台は妙な空気かたゆつていた。

或は待ぶり、兄の友達、桜井や学友豊か遊びにきて、いろいろな話題を出すが、兄はあまり喋らなかつた。それで桜井は、兄へ向かつて

「砂岡、此の頃いやに深刻な顔しているな、そして学校の授業中にも、始終きつい顔を見せているぞ」

――なにを考へているのか――兄は考ふいのか体へマントをはぼりながら、桜井の話を黙まつて聞いていた。

「砂岡が二三日前、学校で倒にこうゆう事も云つたのだ」

と学友は、桜井へ向かつて云つた。そして学友は話を続けた。

「その時の顔は誰へたてじわを造つた。そして〝蒲葵、空渾の曲、空輝 春盛を倒す〟」

桜井この意味解かるか。俺は学校から帰へつて漢詩の本をあさつり、読んで見ると」

「ンー俺も知つている」

と坂井は、学友の言葉をおしきって云い、絶けた。こうゆう事なろう、おしせまった夕やみに、人けもない湖のほとりで、一人の坊さんが歌舞と坐禅をくみ、そして湖の中にいる悪魔を坐禅によって封じこめようかそれとも我が心の中の毒蛇を封じこめようという意味だろう」

と坂井は兄の顔を、学友二人の顔を見ながら云った。学友は「ソーだいたいそうゆうような意味のものだ。それで砂岡の考へている事を、判断して見ると、なにか彫刻切ろうとする苦悩の絶絶に落ち行つているように感じるのだ」

兄の顔をまじまじ見つめながら云った。兄は血面を逆り熱まりこんでいた。

「ソーそうかも知れない。砂岡受験前になにか考へているのか、知らないけど、あまり深く考へるな――それで砂岡、どこの高等学校受ける積りだ。」と坂井は兄へ向かって云った。兄は口を噤き、

「三高を受ける積りだ――」

マントの襟を合せながら、緊張した口調で云った。そして兄は暗い咳をしていた。

「そうか、今の俺では無理だけど、思いきって一高を受けるんだ。」坂井は強ぎった表情で云った。そして二人の学友達もいろいろ有名な名をあげ、貴剣な表情を見せ、張切った口調で云った。

「俺はエンジニヤーになりたいと思うから、工専を受けたいと思っている」と嬉しいような表情で云った。兄は夜が深まるにつれて、苦い咳を、友達の前で始終していた。それでマントを胸の所へしっかりと、合せていた。

坂井や学友達は、いろいろ話しをしたあげくに、帰へって行った。兄は学友の帰へると、直様机に向かった。その姿は、どんよりとした空から雲か霧に包まれた、あたりの屋根／＼へ降り注いでいた。机に向かった兄は、マントの下から、数咳をしていた。咳はもの静かな、部屋でくぐもった、咳の血まった兄は、ペンを置き、両手を合せた。そして合せた両手の上へ、激しく咳伏にな

った。マントをかぶった頭が左右に揺れていた。間もなくしてから、喀血と咳伏せているようにはった。

内伏せている、奥向きに、分厚い本が四冊積み重ねられている場に、地球儀が突立てている、そして地球儀の赤や、青、黄、といった色彩が電気の光線で光っている。

砂岡は寝床で、机に凝然と内伏せている兄を見ていると、なにか目に見えぬいのちと挑戦しているように感じた。そしてしばらく、砂岡は、兄の姿を眺めやってから、蒲団を深くかぶり、うとうとしていた。「エイ――」と、たまらぬ兄の声と同時に、窓ガラスの激しく割れる音がしたので砂岡は、兄の方へ視線を素早く向けた。すると兄は内伏せ状態のまま、そしてマントにくるまっている体が、波によって揺うたせている。

眠りに入る時迄ふつうの地球儀が、今は見ると枕の上にはなかった。そして砂岡は兄へ、視線をうつして見ると、ガラスがギザギザになっていた。窓外の雪は静かに、ゆっくりと降つこいる。闇の中へ、無限に降りしきる雪の光景を砂岡は見つめていた。

兄はマントの下で、なにやら喋やいている。だけど、

「クオヴァデス、トミネ」と、いう言葉だけは、はっきりと聞きとれた。そして時折り、兄は寝しづまった夜更の部屋へ、無気味な声を発散していた。

兄は夜にも、かまめず学校へ登校していた。病、毎日兄は蒲団や学友達に送られて家へ帰ってきた。

兄の顔を見ると、血がにじみついていた。母親はあわてふためく、台所から出てきて、学友達にかかえられている兄の蒼白な顔と、顔の血痕に見はった瞬間、どうしたの、孝ちゃん――と蒼白な顔になって云った。それで蒲団を、ひきながら、兄の病状をいろいろと聞いた。「奥さん、授業中になって先生や、級友で駆けよると、机や本、椅子などが、血でべっとりとしていた。それで内伏せになった。砂岡君の顔をあげると、鼻から血が流れていたのですよ。」と眼鏡のかけた学友、長村が学校での出来事を話しながら、蒲団へ寝せた。母は台所へ、氷枕の用意に、あっちこっちと動き廻りながら、兄についていろいろと、学友達へ聞いている。氷枕にもしタオルを手にし、母は台所から出てきなかった。

「老太郎しつかりして、受験日はもう目の前なのだから。そして試験にパスする為に勉強しているのだから――」

と、雅毋は兄へ水飲みのやて言った。学友達は雅毋の異剣な顔を見ながら黙まって言った。そして雅毋は、血で汚れている兄の顔を、あレタオルで、きれいに拭き、兄をまいまいと眺めながら、「あまり勉強に、無理をするのですもの――私、医者へ電話をかけに行ってくるから、皆様待っててちようだい」と、兄と学友達の顔を見つめて言った。そして家を出ていった。

そこで桜井が、目をつぶって、凝然としている兄へ、「お前は本当に、強引なところがあるな。風邪をしているにもかかわらず、登校するなんて無理だよ――」

「だから俺は『お前、無理しないで休め』と言ったんだ。俺の話にたった首をうなつかせるだけなんだ」民村が、淋しいような表情で言った。そして、又、話を続けた。

「学校で始終、冷刻な顔と、大きな咳をしている熱度を見ると、先生や、友達も気にかかるのだろう。それで特に無理をしないで休めと云われていた。だから俺が休めと、しつこく言っても、うなずくだけで黙まっているのだ――」

眼鏡を動かしながら、民村が言った。砂間は兄のやせた顔を涙然と見つめていると、はっきりと名づけられない、不気味な感じを受けた。

兄の枕元を囲んだ桜井、民村、学友の六人が、今までの兄の態度や、病状について話し合っている。兄は学友達の話を聞いているのか、いないのか目をつぶったまま黙まっている。砂間は当しあっている兄の学友達と、兄の顔を見くらべるように、視線を動かし、見つめていた。

そこへ雅毋が帰ってきた。兄の枕元へ腰おろし、

「老太郎、今、医者がくるから待ってね」

「ン――」

と兄は苦い口を、始めて開いた。しばらくしてから医者が来た。医者は兄の胸へ聴診器をあてながら、「疲れから、血が出たのですよ、あと風邪によって頭が痛むのでしょう――」と言って処方箋を書いてはづし、注射をした。そして医者は帰へり支度をしながら、「五六日寝ておけば

大丈夫だすよー」と聞まれのよい口調で云つた。それで安反逆の妄心して、妻を出た。

兄はその夜、多少気分をとりもどしたのか、

「次郎――観世音菩薩の一番上の棚の隅にある風呂敷包みをもつて来てくれ――」と、床に入つている砂岡へ向かつて云つた。それで砂岡は乗西に、床を抜け、観世音菩薩の本の棚から、長く包んでいる風呂敷を手にし、兄の枕元へ持つてきた。そのついでにと、枕の上の本と帳面、筆入を持つてきてくれと頼まれたので、机へ向つた。机の上の本や帳面を、重ねていると、ひらひらと本のめくれた、紙上に血痕か、けのめから出た文字の所に、三四点の跡を残していた。そして指手にかけられたマントは、妙なしみを見せていた。

砂岡は本と筆入を兄の枕元へ置き、床へ入り、横たになつた。兄は風呂敷包を、静かにふぐしていた。ふぐしているのを見ていると、砂岡は包まつているものはねんであるかを知つた。それは刀であつた。あかあけになつていた兄は、寝たになつて、刀を七寸位抜いた。刀の刃は色気の光線によつて、妙に殺気だつた光を放した。兄はきらぎら光る刀をしばらく見てから

「次郎――ここはせつぱと云つた」と、刃をさきいる所を、砂岡に見せて云つた。砂岡はせつぱの所か、鞘だらけになつているので、

「兄ちゃん、どうして鞘だらけになつているのー」

刃を凝然と見つめている兄へ、聞いた。

「ンーこれか、これは鞘にかけてあるマントと一緒に、爺やからもらつたやつだ。そして爺やの先祖代々から伝つてきた。そして三本の刀の内この刀を之らんでくれたのだ。その時は爺やは、

「この刀は、昔かつて剛い強いた刀だ。そしてこの刀は死にあいこまれる寸前、相手の刀をかつちりとくいとめ、頑張つてきた刀なのだ」

と兄ちゃんへ話すのだ、それで次郎、こうゆう本を開かないか。お爺ちゃん達の、「せつぱつまる」という言葉を、この言葉は刀の「せつぱ」からきているのだそうだ」と、兄はしっかれた声で話すのだ、時所兄は弱へたていわをつくつていた。

兄は刀を風呂敷に包み、あのあけになる蹄間火きな夜をゴホンゴホンと飛けあせつていた。

「兄ちゃん、試験迄体かなほるかな――」と砂岡は、兄の姿を横目に見つつ言った。兄は砂岡の顔を見て「大丈夫だ――」重苦しのある口調で云った。そして砂岡の顔から、視線をはずし、

「兄ちゃんがパスしたら、爺やにもらったマントを着て、学校へ行くのだ」と兄は椅子にかけうかべているマントへ、視線を落として云い、話しを続けた。

「爺やのように偉くなるには、兄ちゃんも次郎も勉強をしなければ駄目だ――」

砂岡は兄の話しから、お墓参りに行く途中の、人力車の中で話してくれた爺やの事が思い出される。

「今持ってきた兄ちゃんの本の所に並かついていたよ」兄ちゃんなにかしたの――」砂岡は兄の横顔を、机元の本を見ながら云った。兄はうつむくと首を動かし、砂岡へ顔を向けた。

「次郎――兄ちゃんは爺やの為にも、次郎の為にも、そして父さん、母さんの為に――」

弱かな口調で喋っていた兄は、突ぜかへった。ひっそりとした静かな部屋で発する兄の唄は、無気味なものとして響える。兄は口へ手を当て、苦しくあせっていた。次の瞬間かへった兄は、

「幸福というものを考へてゐるのだ。それで夜遅くまで勉強をしていると、急に頭が痛くなったので、本の上へしばらく伏せていると、夢から覚め眼出たのだ」

兄は凝然と裏板を見つめながら云った。砂岡は兄の机元に、積み重なっている本を見つめながら、涙を深くかぶった。

「次郎――幸福というものを、死ぬ迄考へ続けるものなのだ」

兄はしゃべってしまった口調で云った。砂岡は兄の考へている幸福というものを、涙の中で考へながら眼りに入った。

学校に行けない兄は、寂寞でかるうづ苦くして勉強をするようになった。そして将来りに対ビって兄は苦しんでいた。

寂寞で勉強を続ける兄を見て、祖母や、父が、

「あまり無理をしないで、体を大切にしてちょうだい――」とか、

「孝太郎――勉強に没頭するのもよいが、今の体で無理するな」と、云われた時の兄は、顔面へしわを寄せて笑らせた。

或はもよい〳〵学友達が兄の所へ見舞にくる、そして受験勉強の話や、地負、人生について、喋べり合っていた、それで兄は、始終気嫌、味な顔と、顔面をひきひきとしたしわを見せていた。そのあけく学友達へ向ってっから帰って〳〵――」と、病床にいる兄は、命令的に云っていた。学友達の帰へる後姿を、兄は病床で羨ぶと見送っていた。学友達の帰った後、兄は椅子にかけられているマントを眺めやっていた、砂岡はこう云った兄の言葉や態度を見ていた。それで砂岡は兄が恐しくて、いつも黙っていた。或る夕方、兄は何思ったか、病床からあつくりと起きあがり、学生服を着た。その上へマントをしっかけ、「次郎――兄ちゃんと一緒に行こう。外は寒あいから、いつぱい服を着ろ――」と砂岡は兄に云れて、暖かい支度をした。兄は台所にいる継母の目を盗んで外へ出た。商下駄をからつかせ鳴って歩いている兄は激しい咳にあせっていた。砂岡は兄の歩くままに、くっついて歩くのやつた。バスに乗った時、始めて砂岡は知つた。それは爺やのお墓詣りと知った。窓外の後方に横たわっている山脈の空に、あざやかな夕映が広がっていた。そして窓外へ通過する、農村の家並や、田畑、多といった風景を、砂岡と兄は黙って見つめていた。間もなくしてから、バスは墓地のある村一着いた、外は激しい風が吹いていた。兄は人力車を頼み、二人は風の中へ乗った。砂岡は兄のマントに、くるまれた。そして兄は、人力車の爺さんに向かって「なるべく早く走ってくれませんか」と懇請い眼の中から云った。それで爺さんは「ハイーキタ」と、元気のいい声を、出したかと思ふと、いせいよく乗バ走った。二人は人力車の中で激しく揺らされていた。砂岡は兄が口へ手をあて、咳にあせるのを見ると、たまらなくなるのを覚えるのだ。「兄ちゃんどうして、こんな所へ来たの」と、砂岡は兄へ質問した。兄はただ黙っているだけだ。それで砂岡も黙っていた、いつか人力車は、道添いの家々の灯を通過させ、墓地の前へ着いていた。外はあいもかわらず風が、激しく吹いていた。あたりの暗くなった、墓地と墓地と間の細い道を、兄にくっついて砂

周は歩いた。林の間から、荒々とした海原が見える。そして荒々とした海原へ、負向い海鳥が鳴をひいている。波は絶えず、すさまじい音をたてていた。兄は鋏やと、お袋の墓地へ長くお詣りをしていた。それから二人は凌霄館へ出た。兄のマントが風に激しく煽られていた。そして兄の高下駄が濕めつた砂地へ、ザクザクと音を立てていた。兄は風の強いのに、顔を深くマントで、うづめていた。そして始終、無気味な咳をしていた。海原へ視線を向けていた。

次から次へ切れたかと思うと、「パーマネントウエーブ」と続ける口調で口ごもんだ。そして二、三度くり返へした。また暫らくしてから、「ケイナミックの世界か——」と、ため息をはいていた。

母、家にあせつた。家の連発に、兄は体をよじらせ、苦しんでいた。

それから兄は、風邪引きをこじらせ、肺炎になつた。兄の部屋へ雑毋の出入れと湯げをかが始終昇つていた。医者あちよいちよい往診にきていた。雑毋は、何日も風呂へ入らない兄の体を、あしタオルで拭き取りながら、「孝太郎——弟友で勉強するのでさへ、体に悪いのに」と、ここまで喋べつたかと思うと、顔をうなだれた。すると兄の蒲団へ、白い水玉が流れ落ちた。そして肩を小きざみに波うたせ、低い声で泣いた。凝然としていた兄は、雑毋の泣き声に、「母さん俺はキツト四修で受験にパスして見せる。俺の念願として有、四修でパスする事なんだ」顔へひきひきとした。そこしめをつくつてきつた。そして兄は歯をくいしばつて、又始しを続けた。「だから、体より勉強へ専念する事に精一杯だよ——。キツト母さんの期待を背つて見せる。——四修でパスし、見せる。」兄は緊張した口調で云つた。時間部屋は、つつしりとした空気かたたよつた。ヤカンの中で煮たつている湯げは、音を発している。そして湯げは、歯へ煙いあかり、凄く消えるつて、舞いあがつていた。砂周は兄の顔をじつとみつめていると、兄の顔ではなく、恐しい不動様の顔に見えていた。兄の顔はかい骨のように、やせおとろいている。そして目をつぶつたまゝ苦しを続けようとする時、「もうなにも云はないで——」兄の体をなぎ終つた雑毋は、台所へ走つていつた。

雑毋は夕方の冷気ください台所で、御飯の支度をしながら泣いていた。

砂周は枕元で、かい骨のような兄の顔をみつめていた。時折りやせおとろいた顔面へ、しわを寄せくつてゐるのだ。そして兄が乱れた呼吸をしていた。

編集後記

⊙ 人は、より良いもの、より美しいものをと願う時、必ずまたならぬ現実の壁に突き当る。この理念と現実とのアムバランスに対する斗いこそ、抵抗に外ならないのだ。

⊙ 紙遊仲間は、総ての点で、それ〳〵に若く幼く貧しいかも知れない。けれども、その若く幼く貧しいなりに、紙遊は日日の生活の余蘊をさいて、ここに一つの雑誌を出すことを得た。又紙遊は、若く幼いなりに、若い者のみに許された希望と自負とを持つている。このさゝやかな雑誌こそ、紙遊のその希望と自負と抵抗との結晶なのである。

微見し広商するところでは、この平市を中心とする地方にもかなりの数の文学愛好者が居る様である。しかし、今し県内でも中通りや会津方部に散やると、何等繋つた交流もなく個々に誇つていると云つた為を思ひ出す。この小誌が、そう云つた意味の人々への、一つの呼び掛けとなれば幸甚だと紙遊は考えてゐる。

楽んで、御批評、御叱責、御激励を願う次第です。

抵抗（創刊号）
昭和三十年十二月二十日印刷
昭和三十年十二月二十四日発行
発行兼編集人　三一　亀明
平市南町二三
発行所　抵抗同人舎

祝創刊

石炭
木炭の御用は

原田商會

平市杖木町
電話

出張
一般製杖業

倉 横倉製杖所

平市谷川瀬一八〇

塗装一般

沢田塗装店

平市才槌小路一

ポンプ器具

岡田商會

平市南町
TEL 一二八四

三猿文庫